

第2編

第2章

心のうちに住む主

第1節

श्रीशुक उवाच

एवं पुरा धारणयात्मयोनि-
नष्टां स्मृतिं प्रत्यवरुध्य तुष्टात् ।
तथा ससर्जेदममोघदृष्टि-
र्यथाप्ययात् प्राग् व्यवसायबुद्धिः ॥ १ ॥

śrī-śuka uvāca

*evam purā dhāraṇayātma-yonir
naṣṭāṃ smṛtiṃ pratyavarudhya tuṣṭāt
tathā sasarjedam amogha-dṛṣṭir
yathāpyayāt prāg vyavasāya-buddhiḥ*

śrī-śukaḥ uvāca—シュリー・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーが言った; *evam*—まったく同じように; *purā*—宇宙の具現に先だって; *dhāraṇayā*—そのような概念によって; *ātma-yoniḥ*—ブラフマジーの—失われた; *smṛtim*—記憶; *pratyavarudhya*—意識を回復させることで; *tuṣṭāt*—主をなだめることで; *tathā*—その後; *sasarja*—創造した; *idam*—この物質界; *amogha-dṛṣṭiḥ*—明確な視野を達成した者; *yathā*—～として; *apyayāt*—創造した; *prāk*—以前のように; *vyavasāya*—確認した; *buddhiḥ*—知性。

シュリー・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーが言った。「昔、主ブラフマーは、宇宙を創造するまえ、ヴィラートウ・ルーパを瞑想し、そして主をなだめることで失っていた意識をとりもどした。こうして、宇宙を以前の状態に作りなおすことができたのである」

要旨解説

シュリー・ブラフマジーについてこの節が言っているのは「忘却」です。ブラフマジーは主

の物質的属性の一つを表わす化身です。物質自然界の激情の様式の化身ですから、美しい物質的現象界を創造する力を主からさずかっています。それでも、無数の生命体の一人であることから、自分が創造エネルギーを持っていることを忘れることがあります。生命体——ブラフマーから最下等の小さなアリまで——がそなえている忘却という傾向は、主のヴィラートゥ・ルーパを瞑想することで打ちけすことができます。その機会が人間になると与えられ、『シュリーマド・バーガヴァタム』の教い、そしてヴィラートゥ・ルーパを瞑想すれば、純粋な意識が復活し、同時に、主との永遠な絆を忘れてしまう傾向が打ちけされます。忘却する傾向がなくなれば、『バガヴァッド・ギーター』（第2章・第41節）で言われている *vyavasāya-buddhi* 「ヴァヴァサーヤ・ブッディ」がすぐに作られます。この結果、主への愛情奉仕に導き、そして生命体に必要な知識が保証されます。神の国は無限です。無限だからこそ主の補佐する手も無限です。『バガヴァッド・ギーター』（第13章・第14節）は、主が宇宙のすみずみまで手・足・目・口を持っていることを断言しています。これは、ジーヴァ・生命体と呼ばれるさまざまな質を持つ拡張体が主の手であることを指しており、全生命体が主に特定の形で仕えているために存在しています。条件づけられた魂は、ブラフマーの地位にさえいても、偽りの自我によって作られた幻想・物質エネルギーに影響され、このことを忘れてしまいます。偽りの自我は、神の意識が得られるよう強く祈ることで消しさることができます。解放とは、忘却という眠りから抜けだすこと、そして主への真実の愛情奉仕をすることであり、それがブラフマーの例でしめされています。ブラフマジーの奉仕は、解放された境地とする奉仕の模範であり、まちがいと忘却だらけのいわゆる利他主義とはまったく質が違います。解放とはなにもしなくなることはありません。人間にそなわっている「まちがえる特質」とは無縁の奉仕なのです。

第2節

शाब्दस्य हि ब्रह्मण एष पन्था
यन्नामभिर्ध्यायति धीरपार्थैः ।
परिभ्रमंस्तत्र न विन्दतेऽर्थान्
मायामये वासनया शयानः ॥ २ ॥

*śābdasya hi brahmaṇa eṣa panthā
yan nāmabhir dhyāyati dhīr apārthaiḥ
paribhramams tatra na vindate 'rthān
māyāmaye vāsanayā śayānaḥ*

sābdasya—ヴェーダの音の; hi—確かに; brahmaṇaḥ—ヴェーダの; eṣaḥ—これら; panthāḥ—その方法; yat—～であるもの; nāmabhiḥ—異なる名前で; dhyāyati—熟考する; dhīḥ—知性; apārthaiḥ—無意味な考えで; paribhraman—さまよっている; tatra—そこに; na—決して～ない; vindate—楽しむ; arthān—現実性; māyā-maye—幻想的な物事に; vāsanayā—さまざまな望みによって; śayānaḥ—眠りの中で夢を見ているように。

ヴェーダの音の表現は聞くものを困惑させるものであり、人々の知性を天国のような無意味な道に向かわせようとしています。条件づけられた魂は、そのような天国の幻想的快樂という夢のなかをさまよってはいても、じつは、そこで実体のある幸福感を味わっているわけではない。

要旨解説

条件づけられた魂は、物質界で幸せになるために、宇宙が終わるときまででさえ、さまざまな計画をたてることに奔走しています。自分の能力を最大限駆使して資源を搾取してきたこの地球で得られる快適な環境にでさえ満足していないのです。月や金星までにでさえ行くつもりで、そこにある資源を利用しようとしています。しかし主は、『バガヴァッド・ギーター』（第8章・第16節）で、この宇宙にある無数の惑星すべて、あるいは別の天体系の惑星すべてに価値はまったくない、と警告しています。無数の宇宙があり、そのすべてのなかに無数の惑星があります。でも、物質存在の主要な苦しみである誕生の苦しみ、死の苦しみ、老年の苦しみ、病気の苦しみから免れる場所の一つもありません。このような物質的な苦しみがあるからこそ、頂点の惑星であるブラフマローカやサッチャローカと呼ばれる頂点の惑星でさえ、幸せに住める場所ではない、と主は言います（ならば、天界の惑星のような他の惑星など言うにおよびません）。条件づけられた魂は果報的活動の法則に厳格に支配されており、そのために、メリーゴーランドに乗った幼稚な子どもたちのように、ブラフマローカに昇ったり、そしてふたたびパーターラローカにまで転落したりしています。ほんとうの幸せは神の国にあり、そこではだれも物質存在の苦しみを経験する必要がありません。ですから生命体に用意された果報的活動というヴェーダの方法は、じつはかれらをまちがって導いているのです。ある人はこの国あつた国でもっと豊かな生活をしたいと考えていますが、物質界はどこでも、ほんとうの生涯の望みである永遠な生活、知性で満たされ、また完璧な幸せに満たされた生活は味わえません。間接的に、シュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは、マハーラージャ・パリークシットに断言しています、生涯の最期に、いわゆる天国の惑星に行きたいなどとは思ってはいけない、ふるさとに、神のもとに帰る準備をしなくてはならない、と。どの物質惑星も、あるいはそこで得られる快適な生活環境も、いつまでもつづきません。そこで楽しみがあるとしても、その

ような一時的な幸福を楽しむことをほんとうに敬遠するきもちがなくではありません。

第3節

अतः कविर्नामसु यावदर्थः
स्यादप्रमत्तो व्यवसायबुद्धिः ।
सिद्धेऽन्यथार्थे न यतेत तत्र
परिश्रमं तत्र समीक्षमाणः ॥ ३ ॥

*ataḥ kavir nāmasu yāvad arthaḥ
syād apramatto vyavasāya-buddhiḥ
siddhe 'nyathārthe na yateta tatra
pariśramam tatra samikṣamāṇaḥ*

ataḥ—この理由で; *kaviḥ*—賢い人物; *nāmasu*—名前だけの; *yāvat*—最低限度; *arthaḥ*—必要性; *syāt*—～でなくてはならない; *apramattaḥ*—それらのために狂奔することなく; *vyavasāya-buddhiḥ*—知的に立脚して; *siddhe*—成功のために; *anyathā*—そうでなければ; *arthe*—～への関心の中で; *na*—決して～すべきではない; *yateta*—～への努力; *tatra*—そこに; *pariśramam*—懸命に働いている; *tatra*—そこに; *samikṣamāṇaḥ*—実際に見る者。

このためにも、賢い者は、名前にあふれた世界に住んでいるうちは最低限必要なもののために努力すべきである。揺るぎない知性に支えられるべきであり、無駄なことのために重労働に励んでも結局はなににも得られないことをよく見抜いたうえで、不必要なことののために努力すべきではない。

要旨解説

バーガヴァタ・ダルマ、すなわち『シュリーマド・バーガヴァタム』の文化は、献愛者が時間の無駄と考える果報的活動の生き方とはまったく違います。全宇宙、いや物質存在そのものすべてが、*jagat* (ジャガト)として動いており、だれもが自分の地位を快適・安全にするためだけに計画することしか考えていません。そして本人たちも、物質的な生活がじつは快適でも安全でもない、または世界がどれほど発達しても快適にも安全にもなれないことを知っています。妄想の道でしかない物質文化というまぼろしの発展に魅了されている人々は、まちがいで狂っています。物質創造界全体が名前というごまかしで動いています。土・水・火という物質で

作られた幻惑の世界なのです。建物、家具、車、邸宅、製粉所、工場、産業、平和、あるいは原子力や電子工学を含む物質科学の最高完成でさえ、三様式に伴う反動による物質要素で作られた幻想の名前の産物です。主の献愛者はそのことがよくわかっていますから、波が作る泡ほどの価値もない名前で満ちた空想の世界のために、不要なものを作ることに無関心です。偉大な王、指導者、兵士と言われた人々も、ほんとうは歴史に自分の名前を刻むために互いに争っています。しかし献愛者は、歴史も歴史的人物も、不安定な時が作り出した無価値な産物にすぎないことを悟っています。果報のために働く人々は、富、女性、世俗の崇拜という形で壮大な幸運を欲しがっていますが、完璧な世界に没頭している人々はそのような偽りの物事にはまったく関心がありません。どれも時間の無駄にすぎないからです。人間生活の一瞬一瞬が貴重であり、賢い人は、よく気をつけたいうで時間を利用すべきです。物質界で幸福になる計画のために費やした時は、たとえ一瞬でも、金貨をどれほど積んでも、なにがあっても取り戻せません。ですから、そのマーヤーの支配、あるいは幻想的な活動の生活から解放されることを望む超越主義者は、この節で、果報的活動者の外的様相に心を奪われてはならない、と警告されています。人間生活は感覚を満たすためにあるわけではなく、自己を悟るためにあります。

『シュリーマド・バーガヴァタム』は、最初から最後まで、この唯一の主題のために私たちに教えを授けています。人間生活はただ自己を悟るためにあります。このもっとも気高い完成を目指す文化は、不必要な物事を作ることにおぼれることはなく、そしてそのような完璧な文化は、私たちが、必要最低限度のものを受けいれるように、すなわち逆境に善処する原則に従うよう導きます。その関係で言えば、肉体も生活も逆境、と言えます。生命体は精神魂ですし、精神的高まりをなんとしても達成しなくてはならないからです。人間生活はこの重要な点を悟るためにあり、その理解にもとづいて行動しなくてはなりません。物質的な楽しみを狂ったように求めるのは、自分のエネルギーを真の目的以外に使うのと同じですから、心をそのような物事に逸らせてはなりません。神からの贈り物にもっと依存し、生活に最低限度必要なものを受けいれる生活をすべきです。物質主義的な発達にもとづく文化は「悪魔の文化」と呼ばれ、私たちが最後には戦争やさまざまな不足におとしられます。この節では超越主義者に対して、心を固定させるように警告されており、それができれば「質素な生活に高邁な思考」の生き方をしているときに困難に直面しても、堅い決意からほんの少しも動くことはありません。超越主義者にとって、感覚満足の世界と親しく接することは自殺と同じです。人生の窮極的な利益を挫折させてしまうからです。シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーがマハーラージャ・パリークシットに会ったとき、後者はそのような出会いを必要としていました。超越主義者の義務は、心から解放を望んでいる人たちを助ける、解放できるきっかけを与えることにあります。シュ

カデーヴァ・ゴースヴァーミーは、マハーラージャ・パリークシットが偉大な王として世界を治めていたときには一度も出会っていないことも、見逃してはなりません。超越主義者の活動のあるべき姿について、次のシュローカで説明されています。

第4節

सत्यां क्षितौ किं कशिपोः प्रयासै-
र्बाहौ स्वसिद्धे ह्युपबर्हणैः किम् ।
सत्यञ्जलौ किं पुरुधान्नापात्र्या
दिग्वत्कलादौ सति किं दुकूलैः ॥ ४ ॥

*satyām kṣitau kim kaśipoḥ prayāsair
bāhau svasiddhe hy upabarhaṇaiḥ kim
saty añjalau kim purudhānna-pātryā
dig-vaḥkalādau sati kim dukūlaiḥ*

satyām—所定の場所にて; *kṣitau*—平らな地面; *kim*—どこに必要性があるか; *kaśipoḥ*—寝台の; *prayāsaiḥ*—~のために努力している; *bāhau*—腕; *sva-siddhe*—自給自足である; *hi*—確かに; *upabarhaṇaiḥ*—ベッドとベッドの台; *kim*—その必要性; *sati*—存在して; *añjalau*—手のひら; *kim*—その必要性; *purudhā*—さまざまな; *anna*—食べられるもの; *pātryā*—食器で; *dik*—空間; *vaḥkala-ādau*—木の皮; *sati*—存在して; *kim*—~の必要性; *dukūlaiḥ*—衣服。

横たわるに十分な平坦地があれば、寝台など必要だろうか。自分の腕が使えるのであれば、枕などいるだろうか。手のひらが使えるのであれば、さまざまな食器が必要だろうか。十分な布や木の皮があれば、衣服が必要だろうか。

要旨解説

体を守ったり快適に保ったりする生活必需品は、いたずらに増やすべきではありません。人の力は、そのようなはかない幸せのために使われると無駄になるものです。床に横たわれるのであれば、立派なベッドや柔らかいふとんのために時間をかける必要があるでしょうか。自然が与えてくれた自分の柔らかい腕を枕がわりに使って眠れるのであれば、枕を買う必要はありません。動物たちが暮らしている様子を見れば、かれらには大きな建物や家具、世帯道具を作る知性がないことはわかりますが、それでも屋外に横たわって体をこわすことなく生きていま

す。料理も食糧を準備するすべも知らなくても、人間よりもシンプルで元気に暮らしています。しかし、こういう話をするのは、なにも人間文化が動物の生活にもどすとか、文化、教育、道徳観などを捨てて、裸でジャングルに住めばいい、と言っているのではありません。知性ある人間は動物のような生活はできません。逆に、人間なら知性を使って芸術、科学、詩歌、哲学を高めるべきです。それができれば、高尚な人間生活をさらに前進させることができます。しかし、この節でシュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーが言いたいのは、人間生活に用意され、また動物よりもはるかに優れているエネルギーは、自己を悟るためだけに使われるべきだということです。人間文化の発達、失われた神との絆をよみがえらせるために向けられるべきであり、それはほかの生物では叶いません。物質現象界の無価値さを知り、物質界をむなしく過ぎ去っていく幻想と捉え、人生の苦しみを解決するために努力しなくてはなりません。洗練された動物文化で感覚を満たす自己満足は幻想であり、それは「文化」とは呼べません。そのような偽りの活動にはしるの、人間はマヤー・幻想にあやつられている、ということです。いにしへの偉大な聖者たちは、豪華な家具や快適な生活ができる邸宅に住んでいたわけではありません。小屋や森に住み、平坦な場所であればどこでも生活していましたが、なおかつ完璧で高尚な知識を収めた膨大な書物という宝物を残しています。シュリーラ・ルーパ・ゴースヴァーミーやシュリーラ・サナータナ・ゴースヴァーミーは、最高級の大臣の地位を捨てたあと、一晩ごとに木を変えて暮らしつつ、超越的な知識を書きしるした膨大な書物を残すことができました。同じ木の下で二晩寝ることがなかったほどですから、いま見られるような快適な環境の整った部屋に住んでいたわけがありません。それでも、自己を悟るためのもっとも重要な文献を私たちに残しました。快適な生活環境が進歩的な文化の助けになるわけではありません。逆に、精神的に高められる生活には有害になったりします。ヴァルナーシュラマ・ダルマでは、4つの社会階級と4つの進歩的な悟りのための階級には、高尚な生活のための十分な便宜と教えが用意されており、誠実な従者は、望ましい人生の目標を達成できるよう、自分からすすんで放棄の生活をするよう助言されています。幼いころから放棄の生活や自己犠牲の生活に不慣れであれば、晩年になったときに、シュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーが勧める生活に慣れるよう努力すべきであり、その心がまえが、望ましい成功を手に入れる助けになります。

第5節

चीराणि किं पथि न सन्ति दिशन्ति भिक्षां
नैवाङ्घ्रिपाः परभृतः सरितोऽप्यशुष्यन् ।

रुद्धा गुहाः किमजितोऽवति नोपसन्नान्
कस्माद् भजन्ति कवयो धनदुर्मदान्धान् ॥ ५ ॥

*cīrāṇi kim paṭhi na santi diśanti bhikṣām
naivāṅghripāḥ para-bhṛtaḥ sarita 'py aśuṣyan
ruddhā guhāḥ kim ajito 'vati nopasannān
kasmād bhajanti kavayo dhana-durmadāndhān*

cīrāṇi—破れた服; *kim*—～かどうか; *paṭhi*—道路に; *na*—～しない; *santi*—～がある; *diśanti*—慈善を施す; *bhikṣām*—布施; *na*—～しない; *eva*—もまた; *aṅghripāḥ*—木々; *para-bhṛtaḥ*—ほかの者を維持する者; *saritaḥ*—川; *api*—もまた; *aśuṣyan*—干上がって; *ruddhāḥ*—閉ざされて; *guhāḥ*—洞穴; *kim*—～かどうか; *ajitaḥ*—全能の主; *avati*—保護する; *na*—～しない; *upasannān*—服従した魂; *kasmāt*—ならばなんのために; *bhajanti*—へつらう; *kavayaḥ*—博識な者; *dhana*—富; *durmada-andhān*—～に陶酔しすぎて。

ぼろは道ばたにいくらでも落ちている。生き物を養うために生きる木がもう慈善を施さなくなっただと思うか。川が干上がり、喉の渴きをいやす水が飲めなくなっただとも言うのか。山の洞窟が埋まったのか、いやそれよりも、身をゆだねようとする魂を全能の主が守ってくれなくなっただとも言うのか。ではなぜ博識な聖者たちは、苦勞して貯めた富に陶酔している者たちに物乞いしているのか。

要旨解説

放棄階級の生活は、まるで寄生虫のように人に物乞いをしたり、金をせびったりして生きるために用意されているものではありません。「寄生虫」を辞書で見ると、社会に依存しつつその社会に貢献しない追従者、とあります。放棄階級は社会のためになることを提供する地位であり、暮らしを世帯者に頼る生活ではありません。真摯な托鉢僧が世帯者から布施を受けいれるのは、寄付者が明確な恩恵が得られるよう聖者が用意した機会なのです。サナータナ・ダルマの制度では、托鉢僧に布施を差し出すことは世帯者の義務の一つであり、経典でも、世帯者は托鉢僧と家族の子どものように接し、乞われなくても食べ物や衣服などを差し出すもの、と述べられています。ですから偽物の托鉢僧が、誠実な世帯者が持つ慈善の心につけこむことがあってはなりません。放棄階級者の最初の義務は、文筆活動をとおして人間社会に貢献し、自己を悟るための教えを人類に与えることにあります。シュリーラ・サナータナ、シュリーラ・ル

ーパ、そのほかのヴリンダーヴァナのゴースヴァーミーたちが従っていた放棄生活のなかでも主要な義務は、ヴリンダーヴァナのセーヴァークンジャ（シュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァーミーが設置したシュリー・ラーダー・ダーモーダラ寺院、そして現在シュリーラ・ルーパ・ゴースヴァーミーとシュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァーミーが埋葬されているほんとうのサマーディ墓碑）で、博識な論議をたがいに交わすことでした。人類すべての恩恵のために、かれらは超越的な重要性を持つ膨大な文献を世に残しました。同じように、進んで放棄階級の生活を受け入れたアーチャーリヤすべては、人間社会が幸せになることが目的であって、他人を犠牲にして快適かつ無責任に暮らすことはしませんでした。しかし、そのような貢献ができない者は、食べ物を乞うために世帯者を訪ねるべきではありません。托鉢僧が世帯者にパンを求める行為は、もっとも高い階級そのものに対する冒涇だからです。シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは、生計の問題を解決するためにこの階級を受け入れた者に対してとくに警告しています。そのたぐいの托鉢僧がカリ時代にあふれています。意欲的に、あるいはやむをえない事情で托鉢僧になった人は、至高主が宇宙の全生命体の維持者であることに堅い信念と確信を持っているはずですが、主への奉仕に全身全霊をこめて身をゆだねるそのような魂を主が養わないことがあるでしょうか。ふつうの主人なら、召使いが必要としているものを叶えてあげるはずですから、全能ですべての富を持つ至高主が身をゆだねた魂の生活に必要なものを出さないことがあるでしょうか。托鉢僧の献愛者は、だれにも乞わずに質素で小さな腰巻きをまとるのが決まりになっています。道路に捨てられているような破れた布を体に巻くだけです。空腹になれば、くだものを落とす寛大な木のところに行き、喉が渴けば川の水を飲みます。快適な家に住む必要はありませんが、丘の洞穴を見つけ、全生命体の心臓に住んでいる神に身をゆだね、密林に住む動物を怖がってはなりません。主は密林に住む虎やほかの動物に、主の献愛者を邪魔しないよう命じることもできます。主チャイタンニヤの偉大な献愛者ハリダーサ・タークラは、ある洞穴に住んでいましたが、たまたま猛毒の大蛇もいっしょにそこに住んでいました。ハリダーサ・タークラの信奉者がよく訪ねてくるのですが、蛇を恐れたかれらは、タークラに別の場所に移ったらどうか、と頼みました。ハリダーサ・タークラは、献愛者たちが蛇を怖がり、それでも定期的に尋ねてくるので、その申し出を受け入れて出ていくことにしました。ところが、話がこのように決まったとき、客人たちが見ているなかで、蛇はその洞穴から出ていきました。蛇の心臓のなかに住む主の指図で、蛇はハリダーサを優先し、邪魔しないために出ていったのでした。これが、タークラ・ハリダーサのような真摯な献愛者を主が守る確かな例です。サナータナ・ダルマの原則では、どのような状況でも主の保護に依存することを若いころから修練することになっています。放棄の道は、完全に悟って完全に純粋な境地に

なった人が受け入れるよう勧められています。この境地は『バガヴァッド・ギーター』（第16章・第5節）で *daiṁī sampat* (ダイヴィー サンパトゥ) と表現されています。人間はこのダイヴィー・サンパトゥ「精神的財産」を積まなくてはなりません。それができなければ、次の選択肢、すなわち *āsuri sampat* (アースリー サンパトゥ) 「物質的財産」がかれを征服し、やがて物質界のさまざまな苦しみを強いられるようになります。サンニャシーはいつでも一人で住み、だれかを伴うことなく、そして恐れのない境地にいたってはなりません。主はだれもの心臓のなかに住んでいますから、定められた方法をとおして純粹になっていない人は、自分一人しか見ることができません。しかし、放棄階級者は、この方法で自分を清めなくてはなりません。そうすればどこに行っても主の存在を感じ、（仲間がいなくても）なにをも恐れのない心境になります。だれでも恐れのない心境に、そして正直な人間になれます——それぞれの生活段階・階級に定められた義務をはたして純粹になれば。ヴェーダの教えを信念をこめて傾聴し、主への献愛奉仕をとおしてヴェーダ知識の真髄を吸収消化すれば、自分に定められた義務に立脚できるようになります。

第6節

एवं स्वचित्ते स्वत एव सिद्ध
 आत्मा प्रियोऽर्थो भगवाननन्तः ।
 तं निर्वृतो नियतार्थो भजेत
 संसारहेतूपरमश्च यत्र ॥ ६ ॥

evam sva-citte svata eva siddha
ātmā priyo 'rtho bhagavān anantaḥ
taṁ nirvṛto niyatārtho bhajeta
samsāra-hetūparamaś ca yatra

evam—このように; *sva-citte*—自分の心臓の中の; *svataḥ*—主の全能性で; *eva*—確かに; *siddhaḥ*—完全に表わされて; *ātmā*—至高の魂; *priyaḥ*—非常に愛しい; *arthaḥ*—本質; *bhagavān*—最高人格主神; *anantaḥ*—永遠で無限な者; *taṁ*—主に; *nirvṛtaḥ*—世界に無執着で; *niyata*—永遠の; *arthaḥ*—至上の利益; *bhajeta*—崇拜しなくてはならない; *samsāra-hetu*—条件づけられた存在の原因; *uparamaḥ*—終結; *ca*—確かに; *yatra*—～であるものの中に。

このように意識を固定させたあと、全能の力で各生命体の心に住む至高の魂に奉仕をしなく

てはならない。主は全能、永遠、無限の人格主神だからこそ、主が人生の窮極目的であり、主を崇拝することで条件づけられた状況の原因を終わらせることができる。

要旨解説

『バガヴァッド・ギーター』（第18章・第61節）で確認されているように、最高人格主神シュリー・クリシュナは、遍在する至高の魂としてどこにでもいます。主こそが真実の対象、そして幻想ではないため、ヨーギーは主だけを崇拝することができます。どの生命体も、別のなにかに仕えています。もともと生命体は「なにかに仕える」立場にいますが、マーヤー・幻想、あるいは条件づけられた状態にいるため、条件づけられた魂は幻想に仕えようとしています。条件づけられた魂は、自分の一時的な体、妻、子どもといった体にかかわるもの、そして体と体に関連するもの（家、土地、財産、社会、国など）を守るために働いていますが、その奉仕のすべてが幻想であることを知りません。これまでなんども話しあってきたように、物質界は砂漠の蜃気楼のように幻想です。砂漠にあるのは幻想の水であり、愚かな動物たちはその幻想にだまされ、砂漠の奥へ奥へと入っていきます——どこにも水はないのに。しかし、砂漠に水がないのは事実だとしても、水そのものがないとは言えません。賢い人なら、水はある、海に行けばある、と知っていますが、その広大な水源は砂漠から遠く離れたところにあります。ですから、水を探すなら、砂漠ではなく海のはずです。だれでもほんとうの幸せ、つまり永遠の生活、永遠あるいは無限の知識、終わることのない喜びに満ちた生活を求めています。それでも、なにを求めるべきか知らない愚かな人々は、幻のなかに真実の生活を見つけようとしています。体は永遠に生きつづけるわけではなく、この一時的な体にまつわるすべて、妻、子ども、社会、国なども、体の変化とともに変わっていきます。これがサムサーラ (samsāra) 「生老病死の繰り返し」です。人々はこれらの問題の答を探そうとしているのですが、その探し方を知りません。この節で提案されているのは、生老病死の繰り返しという苦しみ of 生涯を終わらせたいと思う人は、『バガヴァッド・ギーター』（第18章・第65節）で断言されているように、ほかのだれでもない、至高主を崇拝する方法を始めなくてはならない、ということです。条件づけられた生活の元を断ちたければ、部分体である全生命体への自然な愛情ゆえにかの心のなかに住んでいる主シュリー・クリシュナ（『バガヴァッド・ギーター』 第18章・第61節）の崇拝を始めなくてはなりません。母親の膝のうえにいる赤ん坊は、もちろん母親に執着し、母親も赤ん坊に執着しています。でも、子どもが成長して環境に左右されると、しだいに母親から離れるようになります。母親は、自分は忘れられても、幼いころから変わらぬ愛情をそそいできた大人の我が子からなにかの奉仕を待っています。同じように、私たちはだれもが主の

部分体ですから、主はいつでも私たちに愛情をそそぎ、いつも私たちをふるさとに、神のもとに帰そうとしています。ところが私たち条件づけられた魂は主のことを気にかけず、幻想でしかない体にまつわることしか考えていません。ですから私たちは、自分自身を世界の幻想から救いだし、主との再会を目ざさなくてはなりません。主が窮極の真理だからこそ、主に奉仕をしなくてはならないのです。じつは私たちは、子どもが母親を求めるように主を求めています。そして主を見つけるには、関係のない場所に行ってもなにもなりません——主がいるのは私たちの心のなかですから。といっても、寺院、協会、モスクなどの崇拜の場所に行かなくてもいい、ということではありません。このような神聖な崇拜の場所にも主がいるのです。どこにもいる方ですから。一般人にとって、これらの聖地は神の科学を学ぶセンターともいうべきところですが、寺院がなにもしなければ、一般人もそこには見向きもしなくなり、一般大衆は神を信じなくなります。そして神を信じない文化が現状です。このようなおぞましい文化は生活環境を不自然に高め、だれにとっても耐えがたい生活環境になっていきます。神を信じない文化のなかに住む愚かな指導者たちは、その無神論の世界に平和と繁栄をもたらそうと、「物質主義」という専売特許でさまざまな計画をたてますが、目ざしているものが幻想にすぎないため、大衆が選びだすのは、解決策など出せない無能で盲目的な指導者ばかり。神を信じない文化というこの異常事態を終わらせるには、『シュリーマド・バーガヴァタム』のような啓示經典の原則に、そして物質的な利益に幻惑されないシュリー・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーのような人物の教えに従わなくてはなりません。

第7節

कस्तां त्वनादृत्य परानुचिन्ता-
 मृते पशूनसतीं नाम कुर्यात् ।
 पश्यन्नं पतितं वैतरण्यां
 स्वकर्मजान् परितापाञ्जुषाणम् ॥ ७ ॥

*kaṣṭāṁ tv anādṛtya parānucintāṁ
 ṛte paśūn asatīm nāma kuryāt
 paśyañ janam patitam vaitaraṇyāṁ
 sva-karmajān paritāpāñ juṣāṇam*

kaḥ—ほかの誰か; *tām*—それ; *tu*—しかし; *anādṛtya*—無視することで; *para-anucintām*—超越的な思い; *ṛte*—～なしで; *paśūn*—物質主義者; *asatīm*—永遠ではない物事の中で; *nāma*—名前;

kuryāt—採りいれるだろう; *paśyan*—明確に見ている; *janam*—一般大衆; *patitam*—墮落した; *vaitaraṇyām*—ヴァイタラニー、苦みの川で; *sva-karma-jān*—自分の活動から作り出されて; *paritāpān*—苦しんでいる; *juṣānam*—～に襲われて。

自分の活動の結果として生じる苦みの川に転落した大衆を見ても、そのような超越的な思いを無視し、一時的で名ばかりの物事しか受け入れないのは、愚鈍な物質主義者以外にいるだろうか。

要旨解説

ヴェーダには、最高人格主神を度外視して半神にきもちが向いている者たちは、つれていかれる先が屠殺場であることを知らずに牧夫についていく動物たちのようなものである、とされています。物質主義者たちも、そんな動物のように、至高の人物に対する超越的な思いを無視するためにまちがって導かれていることを知りません。頭のなかをからっぽにすることは、だれにもできません。「暇人の頭は悪魔の仕事場」とよく言われていますが、それは「正しく考えられない者は、災難にいきつくことをする」という意味です。物質主義者は、小さな存在でしかない半神をよく崇拝していますが、そのことは『バガヴァッド・ギーター』（第7章・第20節）で非難されています。物質的な利益に惑わされている人は、幻想ではかない特定の恩恵を手に入れるために、自分の好きな半神にへつらいます。啓発された超越主義者はそのようなまぼろしに心を奪われることはありません。悟りの段階——ブラフマン、パラマートマー、バガヴァーン——とその悟りに応じて至高者への超越的な思いにひたるのです。前の節では、至高の魂に思いをはせなくてはならない、とされています。それは人格主神のヴィラートウ・ルーパを熟考することであり、ブラフマンの非人格的な思いよりも1段階高い境地です。

物事を正しく見られる知性ある人たちは、840万種類の生物のなかで転生を繰り返している生命体、あるいは人間のなかでもさまざまな段階の人間たちを正しく見ることができます。多種多様な手段を使って罪人を処罰するヤマラージャが住む黄泉の国の入り口には、ヴァイタラニー川と呼ばれる果てしない帯状の水が流れている、とされています。罪人は、無数の苦しみを与えられたあと、過去の行動に応じて特定の生物の体を与えられます。天国にいる者、地獄にいる魂たちがいます。さらにブラーフマナとして生まれたり、あるいは守銭奴として生まれたりする者たちもいます。しかし、だれ一人として物質界で幸せな者はおらず、結局は、A級、B級、C級の罪人として生きるのです。主は生命体がどのように苦しんでいるかにかかわらず、公平に対応するのですが、主の蓮華の御足に身をゆだねた魂は特別に守り、ふるさとに、神のもとに帰します。

第8節

केचित् स्वदेहान्तर्हृदयावकाशे
प्रादेशमात्रं पुरुषं वसन्तम् ।
चतुर्भुजं कञ्जरथाराशङ्ख-
गदाधरं धारणया स्मरन्ति ॥ ८ ॥

*kecit sva-dehāntar-hṛdayāvakāṣe
prādeśa-mātram puruṣam vasantam
catur-bhujam kañja-rathāṅga-śaṅkha-
gadā-dharam dhāraṇayā smaranti*

kecit—他の者達; *sva-deha-antaḥ*—体内; *hṛdaya-avakāṣe*—心臓の位置に; *prādeśa-mātram*—たった8インチの大きさで; *puruṣam*—人格主神; *vasantam*—住んでいる; *catur-bhujam*—4本の腕に; *kañja*—蓮華; *ratha-aṅga*—馬車の車輪; *śaṅkha*—法螺貝; *gadā-dharam*—そして手に戦闘棒をして; *dhāraṇayā*—そのように捉えている; *smaranti*—主を瞑想する。

またほかの者たちは人格主神について、8インチ（20.32センチ）程度の大きさの姿で体内の心臓に住み、それぞれの4本の手に、蓮華の花、車輪、法螺貝、戦闘棒を持っている姿として捉えている。

要旨解説

遍在する人格主神は全生命体の心臓のなかにパラマートマーとして住んでいます。局所的な人格主神の寸法は薬指から親指のつけねまでの長さ、8インチ（20.32センチ）程度とされています。主の姿はこの節で、さまざまなシンボル——下の右手から順に上の左手、右手、そして下の左に、それぞれ蓮華の花、車輪、法螺貝、戦闘棒——を持つジャーナルダナと呼ばれ、一般大衆を支配する主の完全拡張体として述べられています。主の姿は、蓮華の花、車輪、法螺貝、戦闘棒という象徴を手に持つ位置に応じてそれぞれ、プルショーッタマ、アチュタ、ナラシンハ、トゥリヴィクラマ、フリシーケーシャ、ケーシャヴァ、マーダヴァ、アニルッダ、プラデムナ、シャンカラ、シュリーダラ、ヴァースデーヴァ、ダーモーダラ、ジャーナルダナ、ナーラーヤナ、ハリ、パドゥマナーバ、ヴァーマナ、マドゥスーダナ、ゴーヴィンダ、クリシュナ、ヴィシュヌムールティ、アドークシャジャ、そしてウペンドラという名前で呼ばれています。局所的な人格主神としてのこの24の姿は、さまざまな天体系の惑星で崇拝されて

おり、それぞれがパラヴォーマと呼ばれる精神界のなかにあるさまざまなヴァイクンタ惑星における主の化身です。ほかにも、主のさまざまな無数の姿があり、それぞれが精神界の特定の惑星に住み、物質界はその精神界の空間のほんの一部を占めているにすぎません。主はプルシヤ、すなわち男性の享樂者として存在し、物質界にいる男性の姿とも比べものにもなりません。しかし、その姿はどれもアドウヴァイタ (*advaita*)、すなわち、それぞれの姿は互いに違わない、そして永遠に若い姿です。4本腕を持つその若い主は、次の節のように美しく飾られています。

第9節

प्रसन्नवक्त्रं नलिनायतेक्षणं
कदम्बकिञ्जल्कपिश्रावाससम् ।
लसन्महारत्नहिरण्मयारादं
स्फुरन्महारत्नकिरीटकण्डलम् ॥ ९ ॥

prasanna-vaktram nalināyatekṣaṇam
kadamba-kiñjalka-piśraṅga-vāsasam
lasan-mahā-ratna-hiraṇmayāṅgadam
sphuran-mahā-ratna-kirīṭa-kuṇḍalam

prasanna—幸福感を表現する; *vaktram*—口; *nalina-āyata*—蓮華の花びらのように開いている; *ikṣaṇam*—目; *kadamba*—カダンバの花; *kiñjalka*—サフラン; *piśraṅga*—黄色; *vāsasam*—衣服; *lasat*—吊られている; *mahā-ratna*—高価な宝石; *hiraṇmaya*—金でできた; *aṅgadam*—装飾品; *sphurat*—輝いている; *mahā-ratna*—高価な宝石; *kirīṭa*—頭飾り; *kuṇḍalam*—耳飾り。

主の口からは幸福感がほとぼしる。目は蓮華の花びらのように見開かれ、着ている衣服は、カダンバの花のサフランに似て黄色く、高価な宝石で飾られている。装飾品は金でできており、宝石がちりばめられている。そしてまばゆくきらめく頭飾りと耳飾りを身につけている。

第10節

उन्निद्रहृत्पङ्कजकर्णिकालये
योगेश्वरास्थापितपादपल्लवम् ।

श्रीलक्षणं कौस्तुभरत्नकन्धर-
मम्लानलक्ष्म्या वनमालयाचितम् ॥ १० ॥

unnidra-hṛt-paṅkaja-karṇikālaye
yogeśvarāsthāpita-pāda-pallavam
śrī-lakṣaṇam kaustubha-ratna-kandharam
amlāna-lakṣmyā vana-mālayācitam

unnidra—咲き誇る; *hṛt*—心; *paṅkaja*—蓮華の花; *karṇikā-ālaye*—その渦巻きの表面に; *yoga-iśvara*—偉大な神秘家達; *āsthāpita*—置かれて; *pāda-pallavam*—蓮華の御足; *śrī*—幸運の女神、あるいは美しい仔牛; *lakṣaṇam*—そのように刻まれて; *kaustubha*—カウストゥバ宝石; *ratna*—ほかの宝石; *kandharam*—肩に; *amlāna*—非常に新鮮な; *lakṣmyā*—美しさ; *vana-mālayā*—花輪によって; *ācitam*—その上に広がっている。

その蓮華の御足は、偉大な神秘家たちの蓮華の心の渦巻き上に置かれている。胸には美しい仔牛が彫られたカウストゥバ石が光り、肩にはその他さまざまな宝石がちりばめられている。非の打ち所のない主の胴体は新鮮な花輪で飾られている。

要旨解説

人格主神の超越的な体を飾る装飾品、花、衣服、ほかの装身具は主の体と同じです。そのどれ一つをとっても、物質的な材質でできているものではありません。物質的なものだとしたら、主の体を飾ることもありません。ですから、パラヴォーマにある精神的多様性は、物質的な多様性とも違いがあるのです。

第 1 1 節

विभूषितं मेखलायाङ्गुलीयकै-
महाधनैर्नूपुरकङ्कणादिभिः ।
स्निग्धामलाकुञ्चितनीलकुन्तलै-
र्विरोचमानाननहासपेशलम् ॥ ११ ॥

vibhūṣitam mekhalayāṅgulīyakair
mahā-dhanair nūpura-kaṅkaṇādibhiḥ

snigdhamalakuñcita-nīla-kuntalair
virocamānānana-hāsa-peśalam

vibhūṣitam—巧みに飾られて； *mekhalayā*—宝石をちりばめた胴輪で飾られた腰
aṅguliyakaiḥ—指輪で； *mahā-dhanaiḥ*—どれもきわめて貴重な； *nūpura*—鈴音をたてる足輪；
kaṅkaṇa-ādibhiḥ—さらに腕輪によって； *snigdha*—滑らかな； *amala*—無垢な； *akuñcita*—カールし
ている； *nīla*—青味を帯びた； *kuntalaiḥ*—頭髪； *virocamāna*—非常に心地よい； *ānana*—顔； *hāsa*—
微笑み； *peśalam*—美しい。

主の腰は装飾品をほどこした胴輪で、指は高価な宝石がちりばめられた指輪で飾られている。
足輪、腕輪、油が塗られて青味を帯びた頭髪、えも言われぬ微笑みが浮かぶその顔など、どれ
も見ると心地よい美しさにあふれている。

要旨解説

最高人格主神は、ありとあらゆる生命体のなかでもっとも美しい方であり、シュリーラ・シ
ュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは、その体の各部すべての超越的な美しさを、一つひとつ説
明しています。それは非人格論者たちに、人格主神は献愛者が崇拜する便宜として想像された
方ではなく、まぎれない事実として、人物として存在していることを教えるためでもあります。
太陽光線が太陽から放たれている光であるように、絶対真理者の非人格的な様相は主の体
から放たれている光なのです。

第 1 2 節

अदीनलीलाहसितेक्षणोल्लसद्-
भ्रूभ्रासंसूचितभूर्यनुग्रहम् ।
ईक्षेत चिन्तामयमेनमीश्वरं
यावन्मनो धारणयावतिष्ठते ॥ १२ ॥

adīna-līlā-hasitekṣaṇollasad-
bhrū-bhaṅga-saṁsūcita-bhūry-anugraham
īkṣeta cintāmayam enam īśvaraṁ
yāvan mano dhāraṇayāvatiṣṭhate

adina—非常に寛大な; *lilā*—崇高な娯楽; *hasita*—微笑んでいる; *ikṣaṇa*—〜へのまなざしによって; *ullasat*—燃えるような; *bhrū-bhaṅga*—眉の表情で; *samsūcīta*—示されて; *bhūri*—広大な; *anugrahaṃ*—恩恵; *ikṣeta*—〜に集中しなくてはならない; *cintāmayam*—超越的; *enam*—この特定な; *īśvaram*—至高主; *yāvat*—〜である限り; *manaḥ*—心; *dhāraṇayā*—瞑想によって; *avatiṣṭhate*—固定させられる。

主が繰りひろげた壮大な娯楽、微笑んでいる主の顔から放たれる鮮やかなまなざしは、主のはかりしれない祝福そのものである。瞑想をとおして心を主に定められるのであれば、主のこの超越的姿にきもちを集中させなくてはならない。

要旨解説

『バガヴァッド・ギーター』（第12章・第5節）で、非人格論者は、姿も形もないものを瞑想するという困難きわまる一連の方法に堪え忍ばなくてはならない、と述べられています。しかし献愛者は主に個人として仕えますから、方法はかんたんです。非人格論者には、修練している非人格的瞑想そのものが苦しみの源なのです。ここが、献愛者が非人格論哲学者よりも有利な立場にいる、と言われるゆえんです。非人格論者は主の人格性を疑っていますから、いつも実在しないものを瞑想しています。この理由で、『シュリーマド・バーガヴァタム』には、主のほんとうの姿に心を明確に集中させることに関して、権威ある言葉があります。

この節で勧められている瞑想法はバクティ・ヨーガ、すなわち物質的状况から解放されたあとに行なう献愛奉仕です。ギャーナ・ヨーガは物質的状况から解放される手段です。物質存在の状况から解放されたあと、あるいは先に説明されたように、すべての物質的必要性（ニヴリッティ）から解放された人は、バクティ・ヨーガが実践できる資格を得ます。これはバクティ・ヨーガにはギャーナ・ヨーガが含まれており、純粋な献愛奉仕を実践すれば同時にギャーナ・ヨーガの目的も叶う、ということです。純粋な献愛奉仕を少しずつ高めていけば、物質的な状况からもおのずと解放されるのです。バクティ・ヨーガの結果をアナルタ・ニヴリッティ（*anartha-nivṛtti*）といいます。不自然に得たことは、バクティ・ヨーガが高まるにつれしだいになくなっていきます。人格主神の蓮華の御足の瞑想は最初のステップであり、アナルタ・ニヴリッティとしてかならず結果が得られます。条件づけられた魂を物質界に縛りつける最悪のアナルタは性欲であり、男性と女性が結ばれることで徐々に深まっていきます。男女が結ばれば、建物、子ども、友人、親族、富などの蓄えをとおして性欲は強くなっていきます。これらの条件がそろると、条件づけられた魂はその束縛に圧倒され、「私自身」「私のもの」という偽の自我意識のおもいが強くなり、性欲はさらに政治・社会・利他主義・博愛主義などの

不必要なかかわりなどに拡大していきます。それは海上に浮かぶ泡のように、あるいは空に浮かぶ雲のように一時的に形を表しても、次の瞬間には消えていきます。条件づけられた魂はそのような産物に、または利益・熱愛・栄誉という性欲から生じる3つの名目に要約される産物にとりかこまれており、そんなかれらがバクティ・ヨーガを修練すれば性欲は少しずつ消えていきます。どの条件づけられた魂もさまざまな形で現われる性欲を追い求めており、自分がどれほど物質的な渴望に縛られているかを知るには、自分がどれほど性欲を克服したかを調べればわかります。食べ物を一口一口食べていくうちに飢えが満たされることがわかるように、自分がどの程度性欲から解放されているかを判断できなくてはなりません。性欲と性欲にまつわる物事はバクティ・ヨーガの方法を高めていくうちに少なくなっていくます。なぜなら、バクティ・ヨーガは、一般教育を十分に受けていなくても、主の恩寵で、献愛者をおのずと知識と放棄心という結果に効果的に導いてくれます。知識とは「物事をありのままに知る」ことであり、知識を得た人は、ある物事についてよく考え、それが不必要なものであることがわかれば捨てるはずです。条件づけられた魂は、知識を高めていくうちに物質的な必需品はほんとうは要らないものだとわかれば、自然にそこからきもちが離れていくものです。この知識の段階をヴァイラーギャ (*vairāgya*) 「不要な物事に対する無執着」といいます。これまで話しあってきたように、超越主義者はみずから充実していなくてはならず、生活必需品を求めて裕福で盲目の人たちに物乞いをしてはなりません。シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは、食事、睡眠、庇護地という生活必需品は妥協できるかもしれないけれども、性欲の問題を解決しないまま先に進むことはできない、と言います。性欲を抑制できない人は放棄階級の生活を受けいれるべきではありません。この境地にいない人は放棄階級の生活はできません。ですから、適切な精神指導者に導かれながら献愛奉仕を少しずつ高め、『シュリーマド・バーガヴァタム』の原則に従い、ほんとうに放棄階級を受けいれるまえに不純な性欲を抑えなくてはなりません。

浄化される、とは、徐々に性欲から解放されていくということであり、この節が説明しているように、主の御足からはじまり、主の人格を瞑想することで達成できます。自分がどれほど性欲から解放されているかわからないのに、不自然に上を目ざすべきではありません。主の微笑みは『シュリーマド・バーガヴァタム』の第10編ですが、すぐにこの第10編から、とくに主のラーサ・リーラー (*rāsa-līlā*) を描写する部分から読む成り上がり者がいます。もちろん不道徳きわまりないことです。不正な『シュリーマド・バーガヴァタム』の研究、あるいはそういう聞き方をする物質的な日和見主義者は、『シュリーマド・バーガヴァタム』の名前を使って性生活にふけ、そのことで混乱を起こしています。『シュリーマド・バーガヴァタム』に対するこのような中傷は、私はクリシュナの従者である、と言う者たちがしています。『シュリ

『シュリーマド・バーガヴァタム』を吟唱するには、性欲を一切捨てなくてはなりません。シュリー・ヴィシュヴァナータ・チャクラヴァルティー・タークラは、浄化とは「性生活にふけることを終えること」とはっきり定義しています。そのことを *yathā yathā dhīś ca śudhyati viṣaya-lāmpaṭyam tyajati, tathā tathā dhārayed iti citta-śuddhi-tāratamyenaiva dhyāna-tāratamyam uktam* と表現しています。そして、知性を清めて性生活という陶酔から解放されれば、次の瞑想に進むことができます。つまり、主の超越的な体の各部分を瞑想する高まりは、心の浄化の段階と比例して高まるのです。結論として、性生活にからまっている人は主の御足から上を瞑想すべきではない、と言えます。ですから、かれらの『シュリーマド・バーガヴァタム』の吟唱は、この偉大な文献の第1編と第2編だけに制限されるべきです。最初の9つの編の内容を吸収消化した上で、浄化の手段を完成させなくてはなりません。そうすれば、『シュリーマド・バーガヴァタム』の第10編の世界に入ることが許されるのです。

第13節

एकैकशोऽङ्गानि धियानुभावयेत्
पादादि यावद्धसितं गदाभृतः ।
जितं जितं स्थानमपोह्य धारयेत्
परं परं शुद्धयति धीर्यथा यथा ॥ १३ ॥

*ekaikaśo 'ngāni dhiyānubhāvayet
pādādi yāvad dhasitam gadābhṛtaḥ
jitaṁ jitaṁ sthānam apohya dhārayet
param param śuddhyati dhīr yathā yathā*

eka-ekaśaḥ—1カ所から次のカ所へ、次々に; *aṅgāni*—手足; *dhiyā*—注視して; *anubhāvayet*—～を瞑想する; *pāda-ādi*—足など; *yāvat*—～まで; *hasitam*—微笑んでいる; *gadā-bhṛtaḥ*—人格主神; *jitaṁ jitaṁ*—徐々に心を抑制すること; *sthānam*—場所; *apohya*—離れている; *dhārayet*—～を瞑想する; *param param*—どんどん高く; *śuddhyati*—浄化されて; *dhīḥ*—知性; *yathā yathā*—できるだけ。

瞑想は主の蓮華の御足から始まり、微笑む顔にいたって終わる。蓮華の御足にきもちを集中させ、次にふくらはぎ、次に腿へと上部に移っていく。その各部の一つひとつに心が定められるほどに、知性は浄化されていく。

要旨解説

『シュリーマド・バーガヴァタム』が勧めている瞑想の過程は、姿や形のない、あるいは「無」にきもちを集中させることではありません。瞑想は最高主神の人格に集中するものであり、その対象はヴィラートゥ・ルーパという巨大な姿、あるいは経典に説明されている主の *sac-cid-ānanda-vigraha* (サッチ・チッドゥ・アーナンダ・ヴィグラハ) の様相 (Bs. 5.1) です。ヴィシュヌの姿には権威ある説明があり、寺院には典拠ある神像という権化が祭られています。こうして主の蓮華の御足に心を集中させて神像を瞑想する修練ができ、徐々に、高い部分に目を移し、最後に主の微笑んでいる顔を見つめます。

バーガヴァタ派の哲学では、主のラーサ・ダンスは主の微笑む顔とされています。この節では、蓮華の御足から微笑む顔に徐々に視線を移すよう勧められていますから、主のラーサ・ダンスという娯楽の理解にいきなり進むべきではありません。主の蓮華の御足に花やトラシを捧げて集中する修練をするべきです。こうして、アルチャナーの方法に従って徐々に浄化されていきます。主を着飾ったり主を沐浴したりすれば、この超越的な活動が私たちの存在そのものを清めてくれます。浄化されるための高い基準に到達し、主の微笑む顔を見たり主のラーサ・ダンスについて聞いたりすれば、主の活動を味わえるようになります。ですから『シュリーマド・バーガヴァタム』では、ラーサ・ダンスの娯楽は第10編（第29-34章）でくわしく説明されています。

主の蓮華の御足、ふくらはぎ、腿、胸など、超越的な姿に心を集中させるほどにその心は浄化されていきます。この節では「さらに知性が浄化される」とはっきり述べられており、それは、さらに感覚満足から解放されていく、という意味でもあります。現在の生活環境での知性は、感覚満足に没頭しているために不純な状態にあります。主の超越的な姿を瞑想する結果は、感覚満足からの解放として表われてきます。ですから、瞑想する窮極の目的は知性を浄化することにあります。

あまりにも感覚満足に心が夢中になっている人々は、アルチャナー崇拝をすることも、ラーダー・クリシュナやヴィシュヌ神像の超越的な姿に触れることも許されていません。そのような人々には、主の巨大なヴィラートゥ・ルーパを瞑想するほうがふさわしく、それが次の節で勧められています。その理由から、非人格論者と虚無主義者は主の宇宙体を瞑想することが勧められていますが、献愛者は寺院に祭られている神像を瞑想することが勧められています。非人格論者も虚無主義者も、精神的活動をしなくても十分に浄化されないため、アルチャナーはかれらに勧められていません。

第 1 4 節

यावन्न जायेत परावरेऽस्मिन्
विश्वेश्वरे द्रष्टरि भक्तियोगः ।
तावत् स्थवीयः पुरुषस्य रूपं
क्रियावसाने प्रयतः स्मरेत ॥ १४ ॥

*yāvan na jāyeta parāvare 'smin
viśveśvare draṣṭari bhakti-yogaḥ
tāvat sthavīyaḥ puruṣasya rūpaṁ
kriyāvasāne prayataḥ smareta*

yāvat—～である限り; *na*—～しない; *jāyeta*—高める; *para*—超越的; *avare*—俗な; *asmin*—～であるこの姿に; *viśva-iśvare*—すべての世界の主; *draṣṭari*—目撃者に; *bhakti-yogaḥ*—献愛奉仕; *tāvat*—～である限り; *sthavīyaḥ*—愚鈍な物質主義者; *puruṣasya*—ヴィラートウ・プルシャの; *rūpaṁ*—宇宙体; *kriyā-avasāne*—定められた義務の最後に; *prayataḥ*—適切な集中で; *smareta*—思い出さなくてはならない。

鈍感な物質主義者が、超越的・物質的どちらの世界も見ている至高主に愛情奉仕をするきもちが高められなければ、自分に定められている義務の最後として、主の宇宙体を思い出すか瞑想しなくてはならない。

要旨解説

至高主は物質・精神両方の世界の目撃者です。言いかえれば、至高主は全世界の窮極の受益者・享樂者であり、それが『バガヴァッド・ギーター』（第5章・第29節）で確証されています。精神界は主の内的力、物質界は外的力の表われです。生命体は中間の力の表われで、自分で選びさえすれば超越・物質どちらの世界にも住むことができます。物質界は生命体にふさわしい場所ではありません。私たち生命体は主と精神的に同じ質をそなえているからであり、物質界にいれば、物質界の法則に条件づけられます。主は、自分の部分体であるすべての生命体に超越的世界でいっしょに住んでもらいたいと思い、物質界にいる条件づけられた魂を啓発するために、ヴェーダや啓示経典を用意し、かれらをふるさとに、神のもとに呼びもどそうとしています。あいにく、条件づけられた生命体は条件づけられた生活のなかで三重の苦しみいつもあえいでいるというのに、神のもとに帰ろうとする真剣な思いが持てません。それは、罪と

徳が複雑にからまった、まちがって導かれた生活をしてきたからです。そんなかれらのなかでも徳高いことをする者たちは、主との失われた絆をよみがえらせようとするのですが、主の人格としての様相はどうしてもわかりません。私たちの生きる目的は、主とふれあい、主への奉仕をすることにあります。それが生命体の自然な立場です。しかし非人格論者、あるいは主に愛情奉仕のできない人たちは、主の非人格的様相であるヴィラートウ・ルーパ・宇宙体を瞑想するよう助言されています。いずれにしましても、なんとかして幸せになりたい、そしてなにも拘束されない自然な境地を取りもどしたいと望む人は、主との忘れられた絆を再確立させなくてはなりません。知性が十分にそなわっていない初心の人たちは、主の非人格的様相であるヴィラートウ・ルーパ・宇宙体を瞑想することで、徐々に人格的なかわりができるようになります。そして、さまざまな惑星、海、山、川、鳥、動物、人間、半神、そして私たちが見ているすべてが、主のヴィラートの姿のさまざまな部分や手足であることが理解できるように、これまでの章で描写されてきたヴィラートウ・ルーパを瞑想するようここで助言されています。そのように考えるのも絶対真理者の瞑想のひとつであり、その瞑想がはじまれば、神聖な質をはぐくむようになり、世界は世界中の人々が幸せで平和に生きられる場所であるように見えてきます。人格であろうと非人格であろうと、そのように神を瞑想しなければ、人間らしい優れた質はすべて、自分本来の立場に関する誤解によって包まれてしまいます。またそのような高い知識がなければ、全世界は人間にとって地獄と変わらない場所になるしかありません。

第 15 節

स्थिरं सुखं चासनमास्थितो यति-
 र्यदा जिहासुरिमम्रा लोकम् ।
 काले च देशे च मनो न सज्जयेत्
 प्राणान् नियच्छेन्मनसा जितासुः ॥ १५ ॥

*sthiram sukham cāsanam āsthito yatir
 yadā jihāsur imam aṅga lokam
 kāle ca deśe ca mano na sajjayet
 prāṇān niyacchen manasā jitāsuḥ*

sthiram—乱されることなく; *sukham*—快適な; *ca*—もまた; *āsanam*—座っている場所; *āsthitaḥ*—位置されて; *yatiḥ*—聖者; *yadā*—いつでも; *jihāsuḥ*—捨てることを望む; *imam*—これ; *aṅga*—王よ; *lokam*—この体; *kāle*—ちょうどよい時; *ca*—そして; *deśe*—適切な場所に; *ca*—もま

た; *manaḥ*—心; *na*—～でない; *sajjayet*—惑われないで; *prāṇān*—感覚; *niyacchet*—制御しなくてはならない; *manasā*—心で; *jita-asuḥ*—気を克服している。

王よ。ヨーギーが、人間の住むこの惑星から離れたと思うとき、それができる時間や場所のことで思い悩んではならない。心乱されることなく安らかに座り、気を制御しながら、心を使って感覚を抑制しなければならない。

要旨解説

『バガヴァッド・ギーター』（第8章・第14節）では、主への超越的な愛情奉仕に完全に没頭し、いつでも主を思いだしている人は、主と個人的に結ばれているために主の慈悲をかたんに手にいれる、と言われていました。そのような献愛者は、体から出る好機を求めるつもりはありません。いっぽう、果報的活動と経験主義推論のどちらにもこだわる献愛者は、体を終える好機を選ばなくてはなりません。そんなかれらのための『バガヴァッド・ギーター』（第8章・第23-26節）がその好機について述べています。しかしその好機は、自分の思うとおりに体を終えられる成功したヨーギーにはたいして重要なことではありません。そのヨーギーは、心を使って感覚を抑制できる能力をそなえているに違いありません。心は、主の蓮華の御足のために使えばかたんに抑制できるものです。そのような奉仕をとおして、すべての感覚は自然に主への奉仕に向けられるようになります。それが至高の絶対者に融合する方法です。

第16節

मनः स्वबुद्ध्यामलया नियम्य
क्षेत्रज्ञ एतां निनयेत् तमात्मनि ।
आत्मानमात्मन्यवरुध्य धीरो
लब्धोपशान्तिर्विरमेत कृत्यात् ॥ १६ ॥

manaḥ sva-buddhyāmalayā niyamya
kṣetra-jñā etāṁ ninayet tam ātmani
ātmānam ātmany avarudhya dhīro
labdhopśāntir virameta kṛtyāt

manaḥ—心; *sva-buddhyā*—彼自身の知性によって; *amalayā*—無垢な; *niyamya*—制御することで; *kṣetra-jñā*—生命体に; *etām*—それらすべて; *ninayet*—溶けこむ; *tam*—それ; *ātmani*—自己;

ātmānam—自己; ātmani—超自己に; avarudhya—固着されて; dhīraḥ—十分に満足して; labdha-upaśāntiḥ—完全な至福に到達した者; virameta—～を停止する; kṛtyāt—その他すべての活動。

そのあとヨーギーは、無垢な知性を使って、心を生命体のなかに融合さえ、さらにその生命体を超自己に融合させなくてはならない。そうすることで、満足しきった生命体はもっとも高い満足した境地に位置され、そしてすべての活動を停止させるのである。

要旨解説

心には、考えること、感じること、望むこと、という機能がそなわっています。心が物質主義になる、あるいは物質的なものごとにかかわりつづけると、物質的な発達を促す知識のために動こうとし、やがて核兵器の発明という破壊的な結末に到達します。しかし、その心が精神的な衝動で動くと、完全な喜びと永遠性に満ちたふるさとに、神のもとに帰ろうとするすばらしい目的のために動くようになります。ですから心は、優れた純粋な知性を使って導かなくてはなりません。完璧な知性とは、主に奉仕をすることを指します。生命体は、どのような状況にあっても召使いという状況にいます。どの生命体も、物質的な影響を受けた望み、怒り、欲望、幻想、狂気、嫉妬の命令に仕えています。そして、そういった感情の命令に従っているのに、いつまでも不幸なきもちでいなくてはなりません。しかし不幸な状態にいることに気づき、知性を正しい情報源に向ければ、主への超越的な愛情奉仕に関する情報が入ってきます。上記のような体を作りだすさまざまな感情に仕えることをやめれば、生命体の知性は、物質的な感情という不幸な幻想から解放され、無垢な知性に導かれて主への奉仕ができるようになります。主と主への奉仕は、どちらも絶対的だからこそ、同じです。ですから、無垢な知性と心は主のなかに融合し、その結果、生命体は自分の目撃者にとどまるのではなく、主によって超越的な目で見られるようになります。生命体が主にじかに見られるようになれば、主は自分の望みどおりにその生命体を導こうとし、そして生命体が主の命令に従えば、幻想でしかない満足感を放棄するようになります。無垢な状態にいる生命体は、labdhopaśānti (ラブドホーパシャーンティ) という完全な喜びの境地に到達し、物質的な活動をすべてやめます。

第 17 節

न यत्र कालोऽनिमिषां परः प्रभुः
कुतो नु देवा जगतां य ईश्वरे ।

न यत्र सत्त्वं न रजस्तमश्च
न वै विकारो न महान् प्रधानम् ॥ १७ ॥

na yatra kālo 'nimiṣām paraḥ prabhuḥ
kuto nu devā jagatām ya īsire
na yatra sattvaṁ na rajas tamaś ca
na vai vikāro na mahān pradhānam

na—～ない; yatra—そこで～する; kālah—破壊的な「時」; animiṣām—天界の半神達の;
paraḥ—優位の; prabhuḥ—支配者; kutaḥ—そこにある; nu—確かに; devāḥ—半神達; jagatām—俗
界の生物達; ye—～である者達; īsire—規則; na—～ない; yatra—その点で; sattvam—俗界の徳の
様式; na—～ない; rajas—俗界の激情の様式; tamaḥ—俗界の無知の様式; ca—もまた; na—どち
らもない; vai—確かに; vikārah—変化; na—どちらも無い; mahān—物質的原因の海;
pradhānam—物質自然。

その超越的なラブドーパシャーンティ (labdhopasānti) の境地では、すべてを荒廃させる
「時」、そして俗界の生物を支配する力を持つ半神さえ支配する至高の力である「時」は働か
ない。(ならば、半神たちが支配されることは言うまでもない)。また物質界の徳、激情、無
知さえ、偽の自我さえ、物質の原因の海さえ、物質自然さえ、その境地には存在しない。

要旨解説

すべてを破壊し、過去・現在・未来という現象をとおして天界の半神でさえ支配する「時」
は、超越的な境地では機能しません。時の影響は、誕生・死・老年・病気という症状で表わさ
れ、この4つの物質的原理は、物質界の頂点にあり、人間には途方もない年月である寿命を持
つ住人が住むブラフマローカを含む、すべての場所にあります。だれも乗り越えられない時は
ブラフマーにでさせ死を課すのですから、インドラ、チャンドラ、スーリヤ、ヴァーユ、ヴァ
ルナといったほかの半神たちは言うまでもありません。さまざまな半神が与えている俗界の生
物への天文学的影響は、私たちの目に見えませんが、じっさいに起こっています。物質存在に
いる生命体は邪悪なものごと巻き込まれることを恐れています。超越的境地にいる献愛者
はまったくそのような恐れを感じません。生命体は、物質界の様式の影響を受けながらさまざ
まな種類や形の肉体を変えつづけますが、超越的境地にいる献愛者はグナ・ティータ
(guṇa-tīta)、すなわち物質界の徳の様式・激情の様式・無知の様式を超越しています。だか

からこそ超越的境地には「私は、見るものすべての主人である」という偽の自我はありません。物質自然を支配しようとする生命体の偽の自我は、いわば、燃えさかる炎に飛びこむガのようなものです。ガは火が放つ鮮やかな美しさに心奪われ、その火を楽しむために火のなかに飛びこみ、そして炎はガを燃えつくしてしまいます。超越的な境地にいる生命体は意識が純粹ですから、物質自然界を支配しようとする偽の自我はありません。逆に、純粹な意識がその生命体を至高主に服従するよう導くのであり、そのことは『バガヴァッド・ギーター』（第7章・第19節）で *vāsudevaḥ sarvam iti sa mahātmā sudurlabhaḥ* (ヴァースデーヴァハ サルヴァンム イティサ マハートウマー スドウルラバハ) と表現されています。このような説明は、超越的境地には物質創造界もなければ、物質自然を作りだす原因の海もない、ということを示しています。

このような状況は超越的な境地には実在するのですが、純粹な意識という高尚な境地にいる超越主義者の知識のなかに表わされます。超越主義者は2種類います。非人格論者と献愛者です。非人格論者の窮極目標あるいは終点地は精神界のブラフマジョーティですが、献愛者の窮極目標はヴァイクンタ惑星です。献愛者は、主の超越的な愛情奉仕をするために精神的姿を手に入れることで、上記の状況を経験します。いっぽう非人格論者は主とのふれあいを避けるために、精神的な活動をするための精神的体が得られず、最高人格主神の精神的光のなかに溶けこんで精神的な火花としてとどまります。主は、永遠・喜び・知識という完全な姿をそなえています。ブラフマジョーティという姿や形のない光には永遠性と知識しか含まれていません。ヴァイクンタ惑星も永遠性・喜び・知識の姿ですから、主の住居に入る許しを得た主の献愛者も永遠性・喜び・知識に満ちた体を手に入れます。ですから、どの生命体の体にも違いはありません。主の住居、名前、名声、主にまつわる物事などは、どれも同じ超越的質をそなえており、その超越的な質が物質界とはどう異なっているのかが次の節で説明されています。

『バガヴァッド・ギーター』では、3つの主要な主題、すなわちカルマ・ヨーガ、ギヤーナ・ヨーガ、バクティ・ヨーガについて主シュリー・クリシュナによって説明されていますが、バクティ・ヨーガの修練でしかヴァイクンタ惑星に行くことはできません。あとの2つの方法は、上記のように、ブラフマジョーティの光のなかに導いてはくれますが、ヴァイクンタローカに導く助けとしては充分ではありません。

第18節

परं पदं वैष्णवमामनन्ति तद्
यन्नेति नेतीत्यतदुत्सिसृक्षवः ।

विमुज्य दौरात्म्यमनन्यसौहृदा
हृदोपगुह्यार्हपदं पदे पदे ॥ १८ ॥

*param padam vaiṣṇavam āmananti tad
yan neti netīy atad utsisṛkṣavaḥ
visṛjya daurātmyam ananya-sauhṛdā
hṛdopaguhyārha-padam pade pade*

param—至高者; *padam*—状況; *vaiṣṇavam*—人格主神と関連して; *āmananti*—彼らは知っている; *tad*—それ; *yad*—～であるもの; *na iti*—これではない; *na itī*—これではない; *iti*—そのように; *atat*—神を否定するもの; *utsisṛkṣavaḥ*—避けたいと望む者達; *visṛjya*—それを完全に放棄する; *daurātmyam*—困惑; *ananya*—完全に; *sauhṛdāḥ*—好意に; *hṛdā upaguhya*—自分の心に入れる; *arha*—崇拜に値するだけのもの; *padam*—蓮華の御足; *pade pade*—毎瞬間。

超越主義者は、神と無縁なものを避けようとする。すべてが至高主ヴィシュヌと関係している最高の境地を知っているからである。ゆえに、主と堅く結ばれている純粋な献愛者は困惑するような状況におちいることなく、主の蓮華の御足を心にいつも思い浮かべ、毎瞬間崇拜している。

要旨解説

『バガヴァッド・ギーター』では *mad-dhāma* (マドゥ・ダハーマ) 「私の住居」という言葉がよく使われており、最高人格主神シュリー・クリシュナの見解によると、無限の精神界にはヴァイクンタと呼ばれる惑星、すなわち人格主神の住居が存在します。物質界とその7層の殻からはるかとおく離れたその世界には、太陽も月も、あるいは照明用の電気も必要ありません。惑星そのものが物質界の太陽よりも明るく輝いているからです。主の純粋な献愛者は、人格主神を唯一の頼れる友人として、また幸福を願ってくれる方としていつも考えているため、人格主神と完全に調和しています。そして俗世界の生物は、ブラフマーという宇宙の主ともいべき生物でさえ崇拜するつもりはありません。そんなかれらだけがヴァイクンタ惑星をはっきりと見ることができます。そのような純粋な献愛者は至高主に正しく導かれているので、超越的な理解に関連して、不自然な混乱を作りだすことはありません。なにがブラフマンかブラフマンではないか、マーヤーではないかなどとあれこれ考えず、主と自分是一つだと誤解することもなく、主が万物と離れて存在していると主張し、あるいは神はいない、生命体が神である、神が

化身として現われるときは物質の体を受け入れる、などと考えて時間を無駄にすることはないのです。またかれらは、超越的な理解の道にさまざまな障害を作りだすあいまいな推論も相手にしません。非人格論者や非献愛者たちのほかに、私は主の献愛者である、と見せかける者たちもいますが、口ではそう言っている内心、非人格のブラフマンと一体化して解放を達成する考えにこだわっています。公然と放蕩生活をしながら我流の献愛奉仕を勝手に作りだし、さらにはかれらのような放蕩者でもある知識も常識もないほかの人々をまちがって導いています。ヴィシュヴァナータ・チャクラヴァルティーは、このような非献愛者や放蕩者たちをドゥラートマー (*durātmā*) 「見かけは偉大な魂・マハートマーである心の歪んだ魂たち」と呼んでいます。かれらは、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーが語るこの節の言葉をとおして、超越主義者のリストから完全に除外されています。

このように、ヴァイクンタ惑星はパラン・パダン (*param padam*) と呼ばれる真実かつ最高の住居です。非人格のブラフマジョーティもパラン・パダンも呼ばれることがありますが、それは太陽の光が太陽球体から出ている光であるように、ブラフマジョーティもヴァイクンタ惑星から放たれている光だからです。『バガヴァッド・ギーター』(第14章・第27節)では、非人格のブラフマジョーティは主という個人がいるからこそ存在する光であり、そしてすべてが間接・直接にブラフマジョーティに支えられているので、すべては主から作りだされ、主に支えられ、そして宇宙が破壊されたあとすべては主のなかだけに入っていく、と述べられています。これは、すべては主に依存していないものはなにもない、ということです。純粋な献愛者は、非ブラフマンとブラフマンを離して考えたりして貴重な時間を無駄にすることはしません。主パラブラフマンは、ブラフマンのエネルギーをとおして万物のなかに入っているため、献愛者は、すべては主の所有物、と見ます。献愛者はすべてを主への奉仕に使い、主の創造界を不正に支配しようと考えて自分で困惑することはありません。強い信念を持っているからこそ、みずから奉仕に励み、ほかのすべても主への超越的な愛情奉仕のために使います。献愛者はすべてのなかに主を見て、主のなかにすべてを見ます。ドゥラートマー・心のねじまがった魂が作りだす混乱は、主の超越的な姿を物質的なものと見なすために生じるのです。

第 19 節

इत्थं मुनिस्तूपरमेद् व्यवस्थितो
 विज्ञानदृग्वीर्यसुरन्धिताशयः ।
 स्वपार्ष्णिनापीडय गुदं ततोऽनिलं
 स्थानेषु षट्मूत्रमयेञ्चित्चा मः ॥ १९ ॥

ittham munis tūparamed vyavasthito
vijñāna-dṛg-vīrya-surandhitāśayaḥ
sva-pārṣṇināpīḍya gudam tato 'nilam
sthāneṣu ṣaṭśūnamayej jita-klamah

ittham—このように、ブラフマンの悟りによって; munih—その哲学者; tu—しかし; uparamet—去るべきである; vyavasthitaḥ—適切に位置されて; vijñāna-dṛk—科学的知識によって; vīrya—力; su-randhita—適切に制御されて; āśayaḥ—生活の目標; sva-pārṣṇinā—自分のかかどで; āpīḍya—遮断させて; gudam—空洞; tataḥ—その後; anilam—来; sthāneṣu—それらの場所に; ṣaṭsu—主要な6つ; unnamayet—上昇させなくてはならない; jita-klamah—物質的な望みを消し去ることで。

科学的知識の力で絶対的な悟りに固定され、物質的な望みをすべて消し去らなくてはならない。そのあと、（糞が排泄される）空気の穴をかかどでふさぎ、気を1点から次の主要な6カ所に上昇させなくてはならない。

要旨解説

私はブラフマンを悟った、と豪語しても、物質的な望みが克服できないドゥラートマーたちがたくさんいます。『バガヴァッド・ギーター』（第18章・第54節）では、完全に自己を悟った魂は物質的な望みをいっさい持たない、と明言されています。物質的な望みは、生命体の偽の自我から出てくるものであり、物質自然界の法則を征服しようとする子どもじみた無益な活動をとおして、あるいは5つの要素を支配しようとする望みをとおして表わされます。そのような考え方をしていれば、原子力の発見、あるいは機械を使って宇宙旅行しようとする物質的な科学の知識を信じるようになり、またそのようなちっぽけな物質的な科学の発達を過信した偽の利己主義者は、人類のささやかな努力など一瞬で終わらせる至高主の力にさえ挑戦しようします。正しい心境に立脚し、そしてブラフマンを悟った魂は、至高のブラフマンすなわち人格主神は、あらゆる力をそなえたヴァースデーヴァであることを、そしてかれ（自己を悟った生命体）は自分が至高の全体者の一部であることも完璧に理解しています。ですから、私たちの本来の立場は、仕えられる側と仕える側という超越的な関係のなかで、どのような状況になっても主と協力しあうことにあります。そのような自己を悟った魂は、物質自然界を支配しようとする無益なことをやめます。そして科学的で正しい情報を得ているため、主への忠実な献愛奉仕に励んでいるのです。

ヨーガの定められた方法に従って気の支配を完全に修練した熟達したヨーギーは、次のように体を捨てるよう助言されています。かかとで排泄の穴をふさぎ、次に気を徐々に上部の6カ所、すなわち臍、腹部、心臓、胸、口蓋、眉、そして大脳のくぼみに動かします。定められたヨーガ法による気に支配は機械的に行なわれるもので、その修練も多かれ少なかれ、精神的な完成を得ることを目的とした身体上の努力でもあります。遠い昔では、そのような修練は超越主義者たちがふつうに行なっていましたが、それは当時の生活様式や気質は修練に好都合だったからです。しかし人を不安におとし入れるカリ時代の影響が表われる現代になると、ほとんどだれも、身体的修練であるこの技術を学んでいません。現代での心の集中は、主の聖なる名前を唱えることでもっとかんたんにできます。その結果も、気の制御という内なる修練から得られるものよりも確かな効果があります。

第20節

नाभ्यां स्थितं हृद्यधिरोप्य तस्मा-
दुदानगत्योरसि तं नयेन्मुनिः ।
ततोऽनुसन्धाय धिया मनस्वी
स्वतालुमूलं शनकैर्नयेत ॥ २० ॥

*nābhyām sthitam hṛdy adhiropya tasmād
udāna-gatyorasi taṁ nayen muniḥ
tato 'nusandhāya dhiyā manasvī
sva-tālu-mūlam śanakair nayeta*

nābhyām—臍に; *sthitam*—位置されて; *hṛdi*—心臓に; *adhiropya*—置くことで; *tasmāt*—そこから; *udāna*—高めている; *gatyā*—力; *urasi*—胸に; *taṁ*—その後; *nayet*—引くべきである; *muniḥ*—瞑想にふける献愛者; *tataḥ*—それら; *anusandhāya*—探すために; *dhiyā*—知性によって; *manasvī*—瞑想者; *sva-tālu-mūlam*—口蓋の底部; *śanakaiḥ*—ゆっくりと; *nayeta*—取り入れることができる。

瞑想に集中する献愛者は、気をゆっくりと、臍から心臓へ、心臓から胸へ、胸から口蓋の底部に押しあげなくてはならない。そして知性を使い、適切な場所を探すのである。

要旨解説

気の動きには6種類の周回運動があり、賢明なバクティ・ヨーギーは、知性を使い、瞑想に集中してそれらの場所を探さなくてはなりません。その場所として、この節ではスヴァーディシュターナ・チャクラ (svādhiṣṭhāna-cakra) 「気の発電所」について述べられており、その上部には、つまり腹部と臍のすぐ下に、マニ・プーラカ・チャクラ (maṇi-pūraka-cakra) があります。心臓のなかの上部空間に到達すると、アナーハタ・チャクラがあり、さらに上部に進むと、口蓋の底部、すなわちヴィシュッディ・チャクラに到達します。

第21節

तस्माद् भ्रुवोरन्तरमुन्नयेत्
निरुद्धसप्तायतनोऽनपेक्षः ।
स्थित्वा मुहूर्तार्धमकुण्ठदृष्टि-
निर्भिद्य मूर्धन् विसृजेत्परं गतः ॥ २१ ॥

tasmād bhruvor antaram unnayeta
niruddha-saptāyatano 'napekṣaḥ
sthitvā muhūrtārdham akuṅṭha-dṛṣṭir
nirbhidya mūrdhan visṛjet param gataḥ

tasmāt—そこから; bhruvoḥ—眉間の; antaram—間に; unnayeta—取り入れるべきである; niruddha—遮断することで; sapta—7つの; āyatanaḥ—気の開口部; anapekṣaḥ—すべての物質的楽しみから独立して; sthitvā—保持することで; muhūrta—瞬間の; ardham—半分; akuṅṭha—ふるさとに、神のもとに帰る; dṛṣṭiḥ—目的がそのように向けられている者; nirbhidya—穴を開けることで; mūrdhan—大脳の穴; visṛjet—自分の体を放棄すべきである; param—至高者; gataḥ—そこに行つて。

そのあとバクティ・ヨーギーは、気を眉間に押しあげ、次に、気の7つの開口部を閉じたまま、目ざす場所をふるさとに、神のもとに定めなくてはならない。物質的な楽しみを味わおうとする望みを完全に捨てられるときに、大脳の穴に到達し、物質的関係を放棄して至高者のもとに行くのである。

要旨解説

物質的な関係を断ちきってふるさとに、神・至高者のもとに帰る方法が、この節で勧められています。その条件は、物質的な楽しみを味わおうとする望みを完全に捨てることにあります。寿命と感覚満足に関する物質的な楽しみにはさまざまな段階があります。もっとも長い感覚の楽しみを味わう最高段階について『バガヴァッド・ギーター』（第9章・第20節）で述べられています。しかしどれも物質的な楽しみにすぎず、どれほど長生きしようと、あるいはブラフマローカ惑星に行く必要もないことを十分に納得しなくてはなりません。私たちはなぜがひでもふるさとに、神のもとに帰らなくてはなりませんし、物質的な便宜にも心を奪われてはなりません。『バガヴァッド・ギーター』（第2章・第59節）では、この物質的な無執着は至上の交流に恵まれたときに得られる、と言われていています。そのことをparam dṛṣṭvā nivartate (パラムドゥリシュトゥヴァー ニヴァルタテー)と言います。精神生活がどういふものかを徹底的に理解しなければ、物質的な魅力から解放されることはできません。精神生活に多様性はいっさいない、と公言する非人格論者がいますが、生命体を物質的な楽しみにさらにおとし入れる危険な主張です。ですから、貧弱な知識しかない人はパラム (param)、至高者の考えを持つことはできません。自分はブラフマンを悟った魂だと得意満面に言っても、さまざまな物質的な楽しみにしがみついているのです。知性に欠けるかれらは、この節で述べられているパラムの概念を持つことはできないため、至高者に辿りつくことはできません。献愛者は、精神界、人格主神、そして無限の精神的惑星ヴァイクンタローカでの主との超越的な交流に関する知識をすべてそなえています。この節ではakunṭha-dṛṣṭiḥ (アクンタハ・ドゥリシュティヒ)と述べられています。Akunṭha (アクンタハ) とvaikunṭha (ヴァイクンタハ) は同じ意味を含んでおり、目標を精神界、そして神との個人的なふれあいに定めている人だけが、物質界にいても物質的な関係を捨てることができます。『バガヴァッド・ギーター』にあるこのパラムとパラム・ダーマは、一つ、そして同じです。パラム・ダーマに行く人は物質界には戻ってきません。この自由の境地は物質界の頂点のローカに到達しても手にいれることはできません。

気は7つの開口部、すなわち2つの目、2つの鼻孔、2つの耳、1つの口を通過します。ふつう凡人が死ぬときに口から出ていきます。しかし、気を自在に支配するヨーギーの場合、頭部の大脳の開口部に気で穴を開けて出ていきます。ですから、ヨーギーは上記の7つの開口部すべてを遮断するため、気は自然に大脳の開口部から放出されます。これが、偉大な献愛者が物質的な関係を放棄する確かな兆しです。

第 2 2 節

यदि प्रयास्यन् नृप पारमेष्ठ्यं
वैहायसानामुत यद् विहारम् ।
अष्टाधिपत्यं गुणसन्निवाये
सहैव गच्छेन्मनसेन्द्रियैश्च ॥ २२ ॥

*yadi prayāsyān nṛpa pārameṣṭhyam
vaihāyasānām uta yad vihāram
sahaiva gacchen manasendriyaiś ca
aṣṭādhipatyam guṇa-sannivāye*

yadi—しかr; *prayāsyān*—望みを保持している; *nṛpa*—王よ; *pārameṣṭhyam*—物質界を統治する惑星; *vaihāyasānām*—ヴァイハーヤサという名前の生命体達の; *uta*—～と言われている; *yat*—～であるもの; *vihāram*—楽しみの場所; *aṣṭa-ādhipatyam*—8種類の達成による支配; *guṇa-sannivāye*—自然の三様式の世界で; *saha*—～と共に; *eva*—確かに; *gacchet*—行くべきである; *manasā*—心に伴われて; *indriyaiḥ*—そして感覚; *ca*—もまた。

しかし、王よ。ヨーギーが快適な物質的楽しみ——たとえば、頂点の惑星ブラフマローカに移行されること、8種類のヨーガ完成を達成すること、ヴァイハーヤサたちと宇宙空間を旅すること、無数の惑星の一つに住むことなど——を味わいたいと内心想っていれば、物質的に形成されたそのような心と感覚を携えていかななくてはならない。

要旨解説

高位の天体系には、低位の天体系では味わえない何千何万倍もの物質的楽しみの便宜が用意されています。頂点の天体系はブラフマローカやドゥルヴァローカ（北極星）などの惑星で構成されており、そのすべてがマハルローカを超えた場所に位置しています。その惑星の住人たちは、8種類の神秘的完成の力をそなえています。体を小さくしたり（アニマー・シッディ）、柔らかい羽根よりも軽くなったり（ラギマー・シッディ）する力がすでにあるため、神秘的ヨーガの完成方法を学んだり修練したりする必要がないのです。また、どこでもかしこでも自由に行って、なんでもかんでも手にいれることができるし（プラープティ・シッディ）、もっとも重い物体よりも重くなったり（マヒマー・シッディ）、なにか驚嘆すべきものを自由に作ったり（イーシトウヴァ・シッディ）、物質要素すべてを支配したり（ヴァシトウヴァ・シッディ）

ィ)、どのような望みで叶えさせる力をそなえたり（プラーカーミャ・シッディ）、あるいは気まぐれに思い浮かべた姿にでさえなれる（カーマーヴァサーイター・シッディ）、ということもできます。このような便宜は、高位の惑星に住む人々にとっては天賦の才とも言えるあたりまえに用意されています。かれらには宇宙を移動するのに機械はいりませんし、一瞬のうちに惑星間を移動できます。地球の住人は、もっとも近い星にでさえ宇宙船のような機械の乗り物を使っても行けませんが、高位の惑星に住んでいる高度な能力をそなえた人々は、どのようなことでもかんたんにやっけてのけます。

物質主義者は、そのような天体系になにがあるのか関心がありますから、自分の目で確認したいと考えています。探求心の強い人が自分で直接体験したいと思うから世界中を旅するように、知性に欠ける超越主義者は、高位の惑星で行なわれているすばらしいことを自分で体験したいと思っています。しかしヨーギーは、いま持っている物質主義的な心と感覚でそこに行き、かんたんにそのような望みを満たすことができます。物質主義的な心が強く求めているのは物質界の支配であり、上記のシッディはどれも、世界を支配しようとする願いの表われです。主の献愛者には、偽りではかない現象世界を支配する野心はありません。逆に、至上の支配者である主に支配されたいと考えています。その至上の支配者に仕える望みは精神的で超越的ですから、精神的王国に入ることを許されるには、まず心と感覚を清めなくてはなりません。物質主義的な心でも宇宙最高位の惑星に行くことはできますが、神の国には入れません。感覚は、感覚満足にかかわらなくなったときに「精神的に浄化された」と言えます。感覚には使う対象が必要であり、その感覚が主への超越的な愛情奉仕のためだけに使われれば、物質的な伝染に穢されることはありません。

第 2 3 節

योगेश्वराणां गतिमाहुरन्त-
र्बहिस्त्रिलोक्याः पवनान्तरात्मनाम् ।
न कर्मभिस्तां गतिमाप्नुवन्ति
विद्यातपोयोगसमाधिभाजाम् ॥ २३ ॥

yogeśvarāṇām gatim āhur antar-
bahis-tri-lokyāḥ pavanāntar-ātmanām
na karmabhis tāṁ gatim āpnuvanti
vidyā-tapo-yoga-samādhi-bhājām

yoga-iśvarāṇām—偉大な聖者と献愛者達の; gatim—目的地; āhuḥ—～と言われている; antaḥ—～の中で; bahiḥ—～の外で; tri-lokyāḥ—三天体系の; pavana-antaḥ—空気の中で; ātmanām—希薄な体の; na—決して～ない; karmabhiḥ—果報的活動によって; tām—それ; gatim—速度; āpnuvanti—到達する; vidyā—献愛奉仕; tapaḥ—苦行; yoga—神秘的力; samādhi—知識; bhājām—楽しませる者達の。

超越主義者は精神的な体だけに関心を寄せる。かれらには献愛奉仕、苦行、神秘的力、超越的知識の力があるからこそ、物質界の内でも外でも制限されずに動くことができる。しかし果報的活動者、あるいは愚鈍な物質主義者には、そのような無制限の動きはできない

要旨解説

物質主義的な科学者が機械の乗り物を使ってほかの惑星に移行とする努力は、するだけ無駄な苦勞です。いっぽう、徳高い行ないをすれば天国の惑星に行くことはできるのですが、機械を使った、あるいは粗雑な、あるいは洗練された物質的な活動をしているかぎり、スヴァルガやジャナローカを超えた領域には行けません。濃密な体に縛られない超越主義者は、物質界のなかのどこでも、あるいは物質界の外でも自在に動くことができます。物質界では、マハル、ジャナス、タパス、サッチャ・ローカの天体系を移動し、さらには物質界から外に出て、ヴァイクンタの空間を变幻自在の宇宙飛行士のように飛び回ることができます。ナーラダ・ムニはそのような宇宙飛行士の一人であり、またドウルヴァーサ・ムニも神秘家の一人です。献愛奉仕、苦行、神秘的力、超越的知識の力があれば、だれでもナーラダ・ムニやドウルヴァーサ・ムニのように動くことができます。ドウルヴァーサ・ムニは1年で物質界全体を旅し、そして精神界に入ったとされています。超越主義者の移動の速さは、粗雑・洗練された物質主義者にはまねのできないことなのです。

第24節

वैश्वानरं याति विहायसा गतः
सुषुम्णया ब्रह्मपथेन शोचिषा ।
विधूतकल्कोऽथ हरेरुदस्तात्
प्रयाति चक्रं नृप शैशुमारम् ॥ २४ ॥

vaiśvānaram yāti vihāyasā gataḥ
suṣumṇayā brahma-pathena śociṣā

*vidhūta-kalko 'tha harer udastāt
prayāti cakram nṛpa śaiśumāram*

vaiśvānaram—火の支配神; *yāti*—行く; *vihāyasā*—空間にある道（銀河）によって; *gataḥ*—通過することで; *suṣumṇayā*—スシュムナーによって; *brahma*—ブラフマローカ; *pathena*—～の途中で; *śociṣā*—輝いている; *vidhūta*—洗い流して; *kalkaḥ*—汚れ; *atha*—その後; *hareḥ*—主ハリの; *udastāt*—上方に; *prayāti*—到達する; *cakram*—圏; *nṛpa*—王よ; *śaiśumāram*—シシュマーラという名前の。

王よ。そのような神秘家が、最高の惑星ブラフマローカに到達するために光り輝くスシュムナーをとおって銀河を通過するとき、最初にヴァイシュヴァーナラという火の主宰神が住む惑星に行き、そこであらゆる穢れを完全に洗いながし、そのあと、主ハリ・人格主神と結ばれるためにシシュマーラという圏に向かってさらに上昇していく。

要旨解説

宇宙の北極星とその圏をシシュマーラ圏といい、そのなかに人格主神（クシーロードカシャーイー・ヴィシュヌ）の居住惑星があります。そこに到達するまえ、神秘家は銀河をとおってブラフマローカに向かい、その途中でまず半神が火を支配しているヴァイシュヴァーナラ・ローカに到着します。ヴァイシュヴァーナラ・ローカでヨーギーは、物質界と接触していたあいだに積み重ねていた汚れた罪をすべて洗い流します。空間の銀河はここで、宇宙の頂点の惑星であるブラフマローカに導く経路として表現されています。

第25節

तद् विश्वनाभिं त्वतिवर्त्य विष्णो-
रणीयसा विरजेनात्मनैकः ।
नमस्कृतं ब्रह्मविदामुपैति
कल्पायुषो यद् विबुधा रमन्ते ॥ २५ ॥

*tad viśva-nābhiṁ tv ativartya viṣṇor
aṇīyasā virajenātmanaikaḥ
namaskṛtaṁ brahma-vidām upaiti
kalpāyūṣo yad vibudhā ramante*

tat—それ; *viśva-nābhim*—普遍的な人格主神の臍; *tu*—しかし; *ativartya*—横切っている; *viṣṇoḥ*—主ヴィシュヌ、人格主神の; *añīyasā*—神秘的完成のために; *virajena*—浄化された者によって; *ātmanā*—生命体によって; *ekaḥ*—一人だけ; *namaskṛtam*—崇拜できる; *brahma-vidām*—超越的境地に位置する者達によって; *upaiti*—到達する; *kalpa-āyusaḥ*—43億太陽年の期間; *yat*—その場所; *vibudhāḥ*—自己を悟った魂達; *ramante*—楽しむ。

このシシュマーラは、完璧な宇宙の巡回軸であり、ヴィシュヌ（ガルボダカシャーイー・ヴィシュヌ）の臍と呼ばれている。ヨーギーだけがこのシシュマーラの圏を超え、ブリグのような浄化された聖者が43億年の寿命を楽しむ惑星（マハルローカ）に到達する。この惑星は、超越的境地にいる聖者たちにでさえ崇拜されている。

第26節

अथो अनन्तस्य मुखानलेन
दन्दह्यमानं स निरीक्ष्य विश्वम् ।
निर्याति सिद्धेश्वरयुष्टधिष्ण्यं
यद् द्वैपरार्ध्यं तदु पारमेष्ठ्यम् ॥ २६ ॥

atho anantasya mukhānalena
dandahyamānaṁ sa nirikṣya viśvam
niryāti siddheśvara-yuṣṭa-dhiṣṇyam
yad dvai-parārdhyam tad u pārameṣṭhyam

atho—そこで; *anantasya*—神を支える化身、アナンタの; *mukha-analena*—主の口から放出される火によって; *dandahyamānam*—燃やし尽くしている; *saḥ*—彼; *nirikṣya*—これを見ることで; *viśvam*—宇宙; *niryāti*—出ていく; *siddheśvara-yuṣṭa-dhiṣṇyam*—偉大かつ浄化された魂たちが使う飛行船; *yat*—場所; *dvai-parārdhyam*—15兆4800億太陽年; *tat*—それ; *u*—高尚な人物; *pārameṣṭhyam*—ブラフマーが住むサッチャローカ。

宇宙全体が最終的に破壊される時（ブラフマーの生涯の終わりに）、アナンタの口（宇宙の底）から炎が吐きだされる。ヨーギーたちは、宇宙の惑星すべてが燃やしつくされる様を見つめ、こうしてかれらは、偉大かつ浄化された魂たちが使う飛行船に乗り、サッチャローカに向けて飛んでいく。サッチャローカの寿命は15兆4,800億年である。

要旨解説

この節では、43億年の寿命を持つ浄化された生命体あるいは半神たちが住むマハルローカの住人たちは、宇宙の頂点にある惑星サッチャローカに飛ぶことのできる飛行船を持っている、と言われていています。言いかえれば、『シュリーマド・バーガヴァタム』は、現代の飛行機では（たとえ考えつくほどの速度でも）決して行けないほど遠くにある惑星に関する情報を提供しているということです。『シュリーマド・バーガヴァタム』の言葉は、シュリーダラ・スヴァーミー、ラーマヌジャチャーリヤ、ヴァルラバーチャーリヤといった偉大なアーチャーリヤたちに受けいられています。主シュリー・チャイタンニヤ・マハープラブはとくに、『シュリーマド・バーガヴァタム』を非の打ちどころのないヴェーダの権威書として位置づけていますから、健全な思考力を持つ人なら『シュリーマド・バーガヴァタム』の言葉を見無視することはできないはずで、またその内容が、全ヴェーダ經典の編纂者で父親でもあるシュリーラ・ヴァーサデーヴァの足跡に従っている自己を悟った魂シュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーに語られたのであればなおさらです。主の創造界のなかには、毎日毎晩私たちの目で見ている驚嘆すべき惑星があふれていますが、現代の物質科学の力ではその場所に行くことはできません。ですから、科学的力では超えられない物事を知るとき、断片的な物質科学に頼るべきではありません。一般人は現代科学もヴェーダの知恵もそのまま受けいらしていますが、それは、どちらも凡人の頭脳ではその正否が判断できないからです。どちらかを受けいれるか、どちらも受けいれるしかないのです。しかしヴェーダ式の理解は、アーチャーリヤというより高い権威にささえられています。アーチャーリヤは忠実で博識であることはもちろん、条件づけられた魂特有の欠陥が一つもない解放された魂だからです。しかし現代科学者は、数多くのまちがいを犯す条件づけられた魂です。ですから私たちが頼れる安全な選択は、偉大なアーチャーリヤたちが異口同音に受けいれる『シュリーマド・バーガヴァタム』のような権威あるヴェーダ經典の言葉を受けいれることにあります。

第27節

न यत्र शोको न जरा न मृत्यु-
नार्तिर्न चोद्रेग ऋते कुतश्चित् ।
यच्चित्ततोऽदः कृपयानिदंविदां
दुरन्तदुःखप्रभवानुदर्शनात् ॥ २७ ॥

na yatra śoko na jarā na mṛtyur
nārtir na codvega ṛte kutaścit
yac cit tato 'daḥ kṛpayānidam-vidām
duranta-duḥkha-prabhavānudarśanāt

na—決して～ない; yatra—～がある; śokaḥ—死別; na—～もない; jarā—老年; na—～もない; mṛtyuḥ—死; na—～もない; artiḥ—苦痛; na—～もない; ca—もまた; udvegaḥ—不安; ṛte—～を除いて; kutaścit—時々; yat—～のために; cit—意識; tataḥ—ゆえに; adaḥ—同情心; kṛpayā—心からの同情から; an-idam-vidām—献愛奉仕という方法を知らない者達の; duranta—乗り越えられない; duḥkha—みじめさ; prabhava—誕生と死の繰り返し; anudarśanāt—継続的経験によって。

そのサッチャローカには死別も老年も死もない。どのような苦痛もなく、だから不安もない。しかしときに、献愛奉仕について知らない者たちに、物質界にある超えられない苦しみに縛られている者たちを思うことがあり、それだけがかれの心配事である。

要旨解説

物質主義的な気質を持つ愚かな人々は、語り継がれる権威ある知識を活用しません。ヴェーダ知識は権威にささえられているのですが、体験ではなく、ほんものの権威者が語るヴェーダ経典という正当な言葉をとおして受けいられるものです。大学で教鞭を執る学者になるだけではヴェーダの真意は理解できません。師弟継承をとおしてヴェーダ知識を学んだ真の権威者に近づくことでヴェーダが理解できるのであり、それは『バガヴァッド・ギーター』（第4章・第2節）で説明されています。主クリシュナは、『バガヴァッド・ギーター』そのもののなかに説明されているように、『バガヴァッド・ギーター』の教えを太陽神に伝授し、その知識は師弟継承をとおして太陽神から息子のマヌへ、マヌからイクシュヴァーク王（主ラーマチャンドラの父）に伝えられ、さらにその知識伝授法は、偉大な聖者たちである継承者たちに次々に説明されていきました。しかしやがて権威あるその継承は姿を消し、その知識の真実の精神を復活させるために、主は同じ知識を、純粋な献愛者だからこそ理解できる候補者であるアルジュナにふたたび説明しました。『バガヴァッド・ギーター』の教えは、アルジュナが理解したように、『バガヴァッド・ギーター』のなかで説明されているのですが (Bg. 10.12-13)、アルジュナの足跡に従わない、そしてそのためにその知識の真髓が理解できない愚かな人々がたくさんいます。従うのではなく、愚かな自分たちに劣らない愚かな解釈を打ちだし、その結果、正しく理解できない状態におちいり、またシュードラという知性の足らない従者をまちがって

導いています。ヴェーダの言葉を理解するにはまずブラフマーにならなくてはならないと言われていますが、この指摘には「大学院生の資格がなければ弁護士にはなれない」という考えと同じ重要な意味があります。そう指摘されたからといって知識を高める資格を失うわけではありませんし、特定の科学に対して正しい資格をそなえていない人には必要な指摘です。ヴェーダ知識は、十分な資格のないブラーフマナたちに誤解されることがあります。資格のあるブラーフマナとは、ほんものの精神指導者に導かれて訓練を積んだ人を指します。

ヴェーダの知恵を学ぶことで、至高主・主シュリー・クリシュナと私たちの関係が理解でき、そして、その理解にもとづいて行動することで、ふるさとに、神のもとに帰るという望ましい結果を手に入れることができます。しかし、物質主義者たちにはこのことが理解できません。かれらは、幸せのない場所で幸せになろうとしているのです。偽りの幸せをつかむために、ヴェーダの儀式か有人宇宙船に頼ってほかの惑星に行こうとしますが、苦しむためにある場所で幸せになろうとする物質的な努力をしても、まちがって導かれた人を助けることはできません。結局、さまざまな環境が整っているこの宇宙すべてが、一定期間が過ぎれば終わりを迎えなくてはならないからです。そして、ありふれた幸せのためにたててきた計画もことごとく終わってしまうのです。ですから賢い人なら、ふるさとに、神のもとに帰る計画をたてなくてはなりません。そのような賢者は、誕生、死、病氣、老年という物質存在にあるすべての苦しみを克服することができます。その境地に達した人がほんとうに幸せです。物質存在の不安から解放されたからです。それでも、哀れみぶかい同情者が苦しむ物質主義者たちを見てつらく思うように、神のもとに帰る必要性について教えるために物質主義者のまえに現われることがあります。ほんもののアーチャーリヤたちは、ふるさとに、神のもとに帰っていくこの真実について人々に布教し、じつは幸福のない場所で幸福になろうとするまちがった計画をたてないよう警告をします。

第28節

ततो विशेषं प्रतिपद्य निर्भय-
स्तेनात्मनापोऽनलमूर्तिरत्वरन् ।
ज्योतिर्मयो वायुमुपेत्य काले
वाय्वात्मना खं बृहदात्मकिराम् ॥ २८ ॥

tato viśeṣaṁ pratipadya nirbhayas
tenātmanāpo 'nala-mūrtir atvaran

*jyotirmayo vāyum upetya kāle
 vāyv-ātmanā kham bṛhad ātma-liṅgam*

tataḥ—そのあと; viśeṣam—特に; pratipadya—得ることで; nirbhayaḥ—どのような疑いもなく; tena—それによって; ātmanā—純粋な自己; āpaḥ—水; anala—火; mūrtiḥ—姿; atvaran—超えることで; jyotiḥ-mayaḥ—光輝; vāyum—大気; upetya—そこに到達して; kāle—やがて; vāyu—空気; ātmanā—自己によって; kham—希薄な; bṛhat—偉大な; ātma-liṅgam—自己の本当の姿。

献愛者はサッチャローカに到達したあと、恐れることなく、濃密な肉体に似た希薄な体を得て、次々に土から、水、火、輝く空気へと通過していき、そして空間的境地に到達する。

要旨解説

精神的完成と修練の力でブラフマローカやサッチャローカに到達できる人は、3種類の完成に到達する資格を得ます。敬虔な活動の結果として特定の惑星に到達した人は、かなりの敬虔な活動をしたと言えます。ヴィラートウ、すなわちヒラニャガルバ崇拜の力でその場所に到達した人は、ブラフマーの解放とともに解放されます。ここでは、献愛奉仕の力でその場所に到達した人について特筆されており、かれは宇宙のさまざまな覆いを貫き、そして至高の存在という絶対的な世界で精神的本性を手にいれます。

シュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァーミーの説明では、各宇宙が上下に群をなして集合し、それぞれが別々の7つの層で覆われています。水の部分は7層の覆いを超えたところにあり、各層は「まえの層よりもあとの層が10倍広く」なっています。自分の呼吸でそのような宇宙を作った人格主神は、散在するこの宇宙の群を超えた次元に横たわっています。原因の海の水は、宇宙の水の層とは別の次元に位置されています。宇宙を覆うために使われている水は物質ですが、原因の海の水は精神的です。ですから、この節で言われている宇宙を覆っている水の層は全生命体を包んでいる偽の自我という覆いであり、ここで述べられているように、物質の覆いから順番に解放される漸進的な方法は、濃密な肉体という偽の自我の概念から徐々に解放されていく方法であり、献愛者はみずからを希薄な体という正体に同化させ、最後に神の国という絶対的な領域における純粋な精神的体を手にいれます。

シュリーラ・シュリーダラ・スヴァーミーは、主によって起動された物質自然界の一部をマハトウ・タットヴァという、と確証しています。マハトウ・タットヴァの断片部分が偽の自我と呼ばれています。その自我の一部が音の振動、その音の一部が大気中の空気です。その空気の一部が形に変わり、その形は電気や熱の力で構成されています。熱が地球の芳香を作りだし、

その芳香によって土が作りだされます。このような物質がすべて結合して宇宙現象界を構成しています。宇宙現象界の広さは、直径（両方向）40億マイル（64.36億キロ）と計算されています。そこから宇宙の覆いが始まります。最初の覆いの層は8,000マイル（12,872キロ）の広さがあり、層の順番は火、光、空気、空間と続き、最初の層から次の層への広さは10倍あります。恐れを知らない主の献愛者は、それぞれの層を通過し、すべてが同じ精神的同一性をそなえた絶対的世界に到達します。そして最後に、主と同じ姿をとり、そこで主への超越的な愛情奉仕をします。それが、献愛生活の最高完成です。完璧なヨーギーにとって、この境地以外に望む、あるいは到達する世界はありません。

第29節

घ्राणेन गन्धं रसनेन वै रसं
 रूपं च दृष्ट्या श्वसनं त्वचैव ।
 श्रोत्रेण चोपेत्य नभोगुणत्वं
 प्राणेन चाकृतिमुपैति योगी ॥ २९ ॥

*ghrāṇena gandham rasanena vai rasam
 rūpam ca dṛṣṭyā śvasanam tvacaiiva
 śrotreṇa copetya nabho-guṇatvam
 prāṇena cākūtim upaiti yogī*

ghrāṇena—嗅ぐことによって; *gandham*—香り; *rasanena*—味わうことで; *vai*—まさに; *rasam*—味覚; *rūpam*—姿; *ca*—もまた; *dṛṣṭyā*—視野によって; *śvasanam*—接触する; *tvacā*—接触; *eva*—いわゆる; *śrotreṇa*—耳の振動によって; *ca*—もまた; *upetya*—達成することで; *nabhaḥ-guṇatvam*—空間の同一化; *prāṇena*—感覚器官によって; *ca*—もまた; *ākūtim*—物質的活動; *upaiti*—到達する; *yogī*—その献愛者。

こうして献愛者は、嗅ぐ香り、味わう味覚、姿を見ることによる視野、触れることによる感觸、空間の一体化による耳の振動、そして物質的な活動による感覚器官といった、さまざまな感覚の希薄な対象物を通過していく。

要旨解説

空の外側には希薄な覆いが広がっており、それは宇宙の要素の覆いに似ています。濃密な覆

いは希薄な原因である部分的な材料が発達したものです。ですから、ヨーギーあるいは献愛者は、濃密な要素を除去するとともに、嗅ぐための香りといった希薄な原因をも放棄します。純粹な精神的火花、すなわち生命体は、こうして物質的な穢れいっさいから洗い清められ、神の国に入っていく資格を得るのです。

第30節

स भूतसूक्ष्मेन्द्रियसन्निकर्षं
मनोमयं देवमयं विकार्यम् ।
संसाद्य गत्या सह तेन याति
विज्ञानतत्त्वं गुणसन्निरोधम् ॥ ३० ॥

*sa bhūta-sūkṣmendriya-sannikarṣam
manomayaṁ devamayaṁ vikāryam
saṁsādya gatyā saha tena yāti
vijñāna-tattvaṁ guṇa-sannirodham*

saḥ—彼（その献愛者）；*bhūta*—濃密な肉体；*sūkṣma*—そして希薄な体；*indriya*—感覚；*sannikarṣam*—中立の段階；*manah-mayam*—思考の段階；*deva-mayam*—徳の様式の中に；*vikāryam*—自我；*saṁsādya*—超えている；*gatyā*—その進行によって；*saha*—〜と共に；*tena*—それら；*yāti*—行く；*vijñāna*—完璧な知識；*tattvam*—真理；*guṇa*—物質の様式；*sannirodham*—完全に停止して。

献愛者は、濃密・希薄な覆いを通じたあと自我の段階に入る。この状態に到達したあと、中立の状態で物質自然界の様式（無知と激情）と融合し、徳の様式の自我に到達する。このあと、すべての自我がマハトウ・タットヴァのなかに融合し、純粹な自己の悟りの境地に入る。

要旨解説

純粹な自己の悟りとは、これまでよく話しあってきたように、主に永遠な奉仕をする純粹な意識です。その結果、主の超越的な愛情奉仕という本来の状態に戻り、そのことが次の節ではっきりと説明されます。主から、あるいは別の方法からでも、報酬を期待せずに主に超越的な愛情奉仕をする境地は、物質的な感覚が清められて本来の純粹な感覚がよみがえるときに実現します。ここでは、感覚を清める方法はヨーガ法によるもの、つまり粗雑な感覚が無知の様式

に入り、希薄な感覚が激情の様式に入る手段で達成される、とされています。心は徳の様式に属していることからdevamaya (デーヴァマヤ)「神聖な質」、と呼ばれています。心の完璧な浄化は、「私は主の永遠なしもべである」と確信するときに達成されます。ですから、徳の様式とはいっても物質の様式であることに変わりありませんから、物質的な徳の様式をも超え、浄化された徳、すなわちvasudeva-sattva (ヴァスデーヴァ・サットゥヴァ) に到達しなくてはなりません。このヴァスデーヴァ・サットゥヴァが、神の王国に入る助けになるのです。

この関係でよく覚えておくべきことは、このような方法で献愛者が徐々に解放されていくという教えは典拠に支えられていても、そもそも現代人はヨーガ修練のことを知らないのだから実践できない、という点です。ヨーガで生計をたてている人たちが修練するヨーガは、体にはよくても、そのようなちょっとした成功は上記の精神的解放を達成にはあまりにもほどとおい。5000年前、社会は完璧なヴェーダにもとづいて秩序が保たれ、この節で言われているヨーガはだれにとっても常識で、ブラーフマナやクシャトリアはとくに、だれでもブラフマチャリヤのときから、家庭から遠く離れて精神指導者に導かれながら超越的な技術の訓練を受けていました。しかしいま、その方法を完璧に知る能力はだれにもありません。

ですから主シュリー・チャイタンニャは、現代の有望な献愛者のために、次のような特別の方法をしめして、かんたんに実行できるようにしました。最終的な結果は同じです。最初で最重要な点は、バクティ・ヨーガの重要性を理解することにあります。さまざまな体を持つ生命体たちは、過去の活動と反動に応じてさまざまな体に閉じこめられています。しかし、多様な活動をするうちにバクティ・ヨーガの知識を得た人は、主と精神指導者のいわれのない慈悲をとおして、主に仕えることの大切が理解できるようになります。誠実な魂は、主の代表者である本物の精神指導者に巡りあうという形で主に助けられます。そのような精神指導者の教えをとおして、バクティ・ヨーガの種を授かるのです。主シュリー・チャイタンニャ・マハープラブは、バクティ・ヨーガの種を自分の心に植え、その種を主の聖なる名前や名声などについて聞いて唱えるという「水やりの奉仕」をとおして育てるよう勧めています。冒流することなく主の聖なる名前を唱えて聞くかんたんな方法に従えば、解放された境地に徐々に導かれていきます。主の聖なる名前を唱える3つの段階があります。最初は、冒流をおかしながら唱えている状態で、二番目は深く集中して唱える段階です。三番目の段階が、冒流をおかさない唱名です。深く集中したきもちで唱える二番目の段階、つまり最初と三番目の中間の段階だけにいる人だけが、解放の段階に到達できます。その段階では、体は物質界にいるように見えても、冒流していない段階にいる人はすでに神の国に入っています。この境地に到達するには、以下の方法で自分を守らなくてはなりません。

聞いて唱える、とは、ラーマやクリシュナという主の聖なる名前を唱えたり聞いたりすること（すなわち、ハレー クリシュナ、ハレー クリシュナ、クリシュナ クリシュナ、ハレー ハレー／ハレー ラーマ、ハレー ラーマ、ラーマ ラーマ、ハレー ハレーという16の名前を規則正しく唱えること）ですが、献愛者との交流をとおして『バガヴァッド・ギター』と『シュリーマド・バーガヴァタム』を聞くことも欠かせません。バクティ・ヨーガ修練の初期段階では、心に植えられた種がすでに芽を出しており、そして上記のように、定期的に水をそそぐことでバクティ・ヨーガの蔓は生長を始めます。規則正しく栄養を与えればその蔓はどんどん生長し、これまでの節で学んできたように、宇宙の殻を突き破り、きらめき輝く空間・ブラフマジョーティに入り、さらに昇りつづけてヴァイクンタローカという無数の精神的惑星が浮かぶ精神界に到達します。その惑星群の上にクリシュナローカ、すなわちゴーローカ・ヴリンダーヴァナがあり、成長しつづけた蔓はそのなかで、主シュリー・クリシュナ・人格主神の蓮華の御足というやすらぎの場所を見つけます。ゴーローカ・ヴリンダーヴァナで主クリシュナの蓮華の御足に到達すれば、聞いたり読んだりする水やりの方法、また純粋な献愛奉仕の境地で聖なる名前を唱える方法は、そこで実を結び、神への愛情という形で成長しきった果実は、物質界にいても、その献愛者は自分ではっきりと味わうことができます。「神への愛」という熟した果実は、これまで説明してきた水やりの方法をたえず実践してきた献愛者だけが味わうものです。しかし活動する献愛者は、その蔓が切断されないよういつも心がけなくてはなりません。そのためにも、以下の注意点を忘れてはなりません。

- (1) 純粋な献愛者の御足への冒涇は、美しい庭園に入って内部を破壊する狂った象にたとえられます。
- (2) 純粋な献愛者の御足へのそのような冒涇をしないよう自分を守らなくてはなりません。蔓の周囲に囲いを立てるのです。
- (3) 水をかけると周囲の雑草も育ち、その雑草を抜かなければ、肝心の蔦、すなわちバクティ・ヨーガの蔓を育てる妨げになります。
- (4) その雑草とは「物質的な楽しみ」であり、そのなかには個別性を失って絶対者のなかに自己を没入させること、宗教、経済発展、感覚満足、解放などの望みも含まれます。
- (5) ほかにさまざまな雑草があり、啓示經典の教えに反抗するとか、不必要な仕事にかかわったり、動物を殺したり、物質的な利益や名声や崇敬を切望することが含まれます。
- (6) 十分に世話をしなければ、水やりの方法も雑草を育てる助けになるだけで、肝心の蔓の健全な発育を妨げ、一番必要な「神への愛」という結実は得られません。
- (7) だからこそ献愛者は、修練の始めから種々雑多な雑草を注意深く抜かなくてはなりません。

それができてこそ、たいせつな蔓の健全な発育は妨げられません。

(8) さらにその結果、献愛者は、神への愛という果実を味わい、そして現世でも、主クリシュナといっしょに住み、毎瞬間主を見ることができます。

人生の最高完成は、主との交流のなかで人生をいつも満喫することであり、それが味わえる人は、バクティ・ヨーガ以外の方法で物質界のはかない楽しみを追い求めようとはしません。

第 3 1 節

तेनात्मनात्मानमुपैति शान्त-
मानन्दमानन्दमयोऽवसाने ।
एतां गतिं भागवतीं गतो यः
स वै पुनर्नेह विषञ्जतेऽऽ ॥ ३१ ॥

*tenātmanātmānam upaiti śāntam
ānandam ānandamayo 'vasāne
etām gatiṁ bhāgavatīm gato yaḥ
sa vai punar neha viṣajjate 'ṅga*

tena—その浄化によって; *ātmanā*—自己によって; *ātmānam*—至高の魂; *upaiti*—到達する; *śāntam*—安らぐ; *ānandam*—満足; *ānanda-mayaḥ*—自然にそうになっている; *avasāne*—あらゆる物質的穢れから解放されている; *etām*—そのような; *gatiṁ*—目的地; *bhāgavatīm*—献愛奉仕の; *gataḥ*—～によって達成される; *yaḥ*—その人物; *saḥ*—彼; *vai*—確かに; *punaḥ*—再び; *na*—決して～ない; *iha*—この物質界で; *viṣajjate*—魅了される; *aṅga*—マハーラージャ・パリークシットよ。

浄化された魂だけが、本来の境地で完璧な喜びと満足を感じ、人格主神とのふれあいという完成を手に入れる。そのような献愛奉仕の完成を達成した者は、物質界にふたたび心が惹かれることも、そして戻ってくることもない。

要旨解説

この節で特筆すべき言葉は *gatiṁ bhāgavatīm* (ガティンム パーガヴァティーンム) です。パラブラフマンという最高人格主神の光に没入することは、ブラフマヴァーデーの非人格論者が望んでいますが、パーガティーンムの完成ではありません。パーガヴァタたちは、主の非人格の光に没入することは求めず、精神界にあるヴァイクンタ精神的惑星の一つで、至高主と個人的に

ふれあうことを熱望しています。精神界全体にはひじょうに小さな部分・物質界が含まれており、また無限の数のヴァイクンタ惑星で満たされています。献愛者（バーガヴァタ）の最終目的地はそのヴァイクンタ惑星の一つに入っていくことにあり、そして人格主神はその惑星で無限の拡張体となって、無数の純粋な献愛者たちとの交流を楽しんでいます。物質界にいる条件づけられた魂は献愛奉仕をして解放されたあと、このような惑星に高められていきます。いっぽう永遠に解放された魂の数は、物質界にいる条件づけられた魂よりもはるかに多く、かれらは、このみじめな物質界を訪ねるきもちなどまったくありません。

姿も形もないブラフマジョーティの光に没入しようと強く願っている非人格論者には、精神的な現象世界で個人としての主に愛情をこめて献愛奉仕をすることは考えておらず、そんなかれらは、川で生まれたあと、大きな海に移り住む魚にたとえることができます。海に入っても、魚たちはいつまでもとどまることはできません。感覚満足への衝動がかれらをふたたび川を昇らせ、そして卵を産ませるのです。同じように、物質主義者が限りある物質界で楽しもうとする試みに挫折すると、原因の海に没入して非人格的な解放を求めたり、非人格のブラフマジョーティに入ろうとしたりします。しかし、原因の海や非人格のブラフマジョーティの光にすがっても、感覚的な接触や活動の代わりになる優れたものは得られないため、ふたたび、この限りある物質界に転落し、誕生と死という車輪のなかに絡まり、感覚満足を求めようとする消すことのできない望みに溺れてしまうのです。しかし、献愛奉仕をとおして感覚を超越的な奉仕に使い、その結果神の国に入り、解放された魂や人格主神と交流する献愛者たちは、物質界という限られた世界に魅了されることはありません。

『バガヴァッド・ギーター』（第8章・第15節）でも同じことが確証されており、主は「偉大なマハートマー、すなわちバクティ・ヨーギーは、わたしの住居に到達したあと、苦しみとはかさに満ちた物質界には戻らない」と言っています。ですから、人生の最高完成は主と交流できるようになることであり、それ以外にはありません。バクティ・ヨーギーは、全霊をこめて主に仕えているので、ギャーナやヨーガ、その他の解放にも魅力を感じません。純粋な献愛者とは100%主の献愛者であり、ほかの何者でもありません。

この節では、*śāntam*（シャーンタンム）と *ānandam*（アーナンダンム）という言葉にも着目すべきです。これは、主への献愛奉仕は献愛者に重要な2つの恩恵、すなわち平和と満足を授けることができる、という意味です。非人格論者は至高者と一つになろうとしています。それは別の言い方をすれば、自分が至高者になりたいと思っているのです。そしてそれはぜったいにありえません。神秘主義のヨーギーはさまざまな神秘的な力を欲しがっているため、平和も満足も味わうことができません。このように、非人格論者もヨーギーもほんとうの平和や満足を味わ

えないのですが、献愛者は、完全全体者とのふれあいをおして完全に平和な心と満足感を味わうことができます。そのような献愛者にとって、絶対者のなかに没入すること、あるいはなにか神秘的な力を得ることなど、なんの魅力もありません。

神への愛を得るのは、すべての魅力から解放されるのと同じです。条件づけられた魂は、宗教家になるとか、最高の享樂者になるとか、神になるとか、あるいは神秘家のような力を授かって、好きなものを手にいれたり好きなことをしたりする、という多くの野望をいただいています。そのどれも、神への眠っている愛情を目覚めさせようとする献愛者によって拒否されます。不純な献愛者は、献愛奉仕をして上記の物質的な完成を得ようとしています。しかし純粋な献愛者は、物質的な望みの影響にすぎない非人格的な推論、そして神秘的な力を得ようとする不純なことは一つ欲しがりません。純粋な献愛奉仕をおして、あるいは人格主神という献愛者が愛する方のためにする「自発的で、愛するゆえの自発的な活動」をおして、神への愛情という境地に入ります。

もっとはっきりと言えば、神を愛する境地に到達したいと思う人は、物質的な楽しみへの望みをすべて捨てなくてはならないのであり、半神の崇拝をやめ、最高人格主神の崇拝だけに没頭しなくてはならない、ということです。主と一つになる、とか、人々からむなしい崇敬を得るためにすばらしい神秘的力を得ようとする望みを捨てなくてはなりません。純粋な献愛者は、主への奉仕に心から励み、楽しもうとする期待もありません。そのような心がまえが、神への愛情をもたらし、この節で言われているような、*śāntam* (シャーンタンム) と *ānandam* (アーナンダム) の境地に導いてくれるのです。

第32節

एते सृती ते नृप वेदगीते
त्वयाभिपृष्टे च सनातने च ।
ये वै पुरा ब्रह्मण आह तुष्ट
आराधितो भगवान् वासुदेवः ॥ ३२ ॥

ete sṛtī te nṛpa veda-gīte
tvayābhipṛṣṭe ca sanātane ca
ye vai purā brahmaṇa āha tuṣṭa
ārādhito bhagavān vāsudevaḥ

ete—説明されたすべて; *sṛtī*—方法; *te*—あなたに; *nṛpa*—マハーラージャ・パリークシットよ;

veda-gīte—ヴェーダの見解によると; tvayā—陛下によって; abhipr̥ṣṭe—適切に尋ねられて; ca—もまた; sanātane—永遠な真理に関連して; ca—確かに; ye—～であるもの; vai—確かに; purā—～の前に; brahmaṇe—主ブラフマーに; āha—言った; tuṣṭaḥ—満足して; ārādhitāḥ—崇拝されて; bhagavān—人格主神; vāsudevaḥ—主クリシュナ。

マハーラージャ・パリークシットよ。あなたの正しい質問に答えた私の言葉はすべてヴェーダの見解にもとづいており、永遠な真理でもある。またそれは、ブラフマーから適切に崇拝されて満足した主クリシュナが、ブラフマーに直接語ったことである。

要旨解説

精神界に到達する2つの方法によって物質的束縛から解放されること、すなわち神の国に到達する直接の方法と宇宙内の他の高い惑星を徐々に通過していく方法が、ヴェーダの見解に正確に沿ってこれまでしめされてきました。このことについてヴェーダが述べています—*Yadā sarve pramucyante kāmā ye 'sya hṛdi śrītāḥ/ atha martyo 'mṛto bhavaty atra brahma samaśnute* (『ブリハドゥ・アーラニヤカ・ウパニシャッド』第4編・第4章・第7節) 「心の病である物質的望みすべてから解放された者たちは、死を克服し、アルチ惑星を通過して神の国に入っていく」。ヴェーダの見解は『シュリーマド・バーガヴァタム』の見解と一致しており、後者はシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーによってさらに確証されています。つまり、真理は最高人格主神・主シュリー・クリシュナ、ヴァースデーヴァからヴェーダの最初の権威者であるブラフマーに明らかにされた、ということです。師弟継承の流れは、ヴェーダは主クリシュナからブラフマーに語られ、ブラフマーからナーラダへ、ナーラダからヴァーサデーヴァへ、そしてヴァーサデーヴァからシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーへと受け継がれてきました。ですから、権威者たちのあいだに意見の違いはいっさいありません。真理は永遠ですから、その真理について新しい意見が加えられることはありません。それがヴェーダの知識を知る方法です。学術的知識や通俗な学者が話す流行の解説で理解すべきことでもありません。付けくわえることも、取りさることもできない——真理は真理だからです。結局、なにかの権威を受けいれなくてはなりません。一般人にとって、現代科学者が特定の科学的真理に関連する権威者です。一般人は科学者の意見に従うものです。一般人は権威に従う、ということでもあります。ヴェーダの知識もそのようにして受けいられるものです。凡人には、空や宇宙を超えた世界について主張できるほどの意見はありません。このように私たちは、ヴェーダの見解を、権威ある師弟継承をとおして理解されてきたように受けいれるべきです。『バガヴァッド・ギーター』の第4章でも、『バガヴァッド・ギーター』を理解する同じ方法が説明されていま

す。アーチャーリヤが説く権威ある意見に従わないのであれば、ヴェーダの真理を自分の力でやみくもに追求するしかありません。

第33節

न ह्यतोऽन्यः शिवः पन्था विशतः संसृताविह ।
वासुदेवे भगवति भक्तियोगो यतो भवेत् ॥ ३३ ॥

*na hy ato 'nyaḥ śivaḥ panthā
viśataḥ saṁsṛtāv iha
vāsudeve bhagavati
bhakti-yogo yato bhavet*

na—決して～ない; *hi*—確かに; *ataḥ*—これ以外に; *anyaḥ*—それ以外のすべて; *śivaḥ*—吉兆な; *panthāḥ*—方法; *viśataḥ*—さまよっている; *saṁsṛtau*—物質界で; *iha*—この生涯で; *vāsudeve*—主ヴァースデーヴァ、クリシュナに; *bhagavati*—人格主神; *bhakti-yogaḥ*—直接の献愛奉仕; *yataḥ*—その中に; *bhavet*—～に帰結する。

物質宇宙をさまよいつづける者たちにとって、主クリシュナへの直接の献愛奉仕が目的としているほどに吉兆で、そしてかれらを解放させてくれる方法はない。

要旨解説

次の節ではっきりと説明されるように、直接のバクティ・ヨーガ・献愛奉仕は、物質存在という束縛から解放させてくれる絶対的で吉兆な唯一の方法です。物質存在の束縛から解放される方法はほかにもたくさんありますが、そのどれをとってもバクティ・ヨーガほどかんたんで吉兆なものはありません。ギャーナやヨーガの方法、それに類似した修行法は、それだけで実践する人を解放させることはできません。そのような方法は、多くの誕生を繰り返したあとにバクティ・ヨーガの境地に到達する助けにはなってくれず、『バガヴァッド・ギーター』(第12章・第5節)では、絶対者の非人格的様相に執着している者たちは、その探求の道で多くの問題にまきこまれ、経験主義哲学者も絶対真理を探求する生涯をなんども繰り返したあとに、ヴァースデーヴァの悟りの重要性を悟る (Bg. 7.19)、とされています。ヨーガの方法については、『バガヴァッド・ギーター』(第6章・第47節)で、絶対真理を追求する神秘家たちのなかでも、主への奉仕にいつも励んでいる者がもっとも優れている、とされています。

す。そして『バガヴァッド・ギーター』（第18章・第66節）の最後の教えでも、自己を悟るための、そして物質的束縛から解放されるほかの活動や方法を捨てて、主に完全に身をゆだねるよう勧められています。そしてすべてのヴェーダ経典の目的は、私たちがぜひとも主への超越的愛情奉仕を受け入れるよう導くことにあります。

『シュリーマド・バーガヴァタム』（第1編）ですでに説明されたように、果報的活動とは無縁の直接のバクティ・ヨーガ、あるいは最終的にバクティ・ヨーガをきわめる方法は、最高段階の宗教です。バクティ・ヨーガ以外のどの方法を実践しても、その人はただ時間を無駄にしているにすぎません。

シュリーラ・シュリーダラ・スヴァーミー、そしてジーヴァ・ゴースヴァーミーをはじめとするアーチャーリヤたちすべてが、バクティ・ヨーガこそ、かんたんで単純明快で、やっかいな問題に巻きこまれない、そして人類にとっての幸福の源である、と断言しています。

第34節

भगवान् ब्रह्म कार्त्स्न्येन त्रिरन्वीक्ष्य मनीषया ।
तदध्यवस्यत् कूटस्थो रतिरात्मन् यतो भवेत् ॥ ३४ ॥

*bhagavān brahma kārtsnyena
trir anvīkṣya manīṣayā
tad adhyavasyat kūṭa-stho
ratir ātman yato bhavet*

bhagavān—偉大な人物ブラフマー; *brahma*—ヴェーダ; *kārtsnyena*—要約することで; *triḥ*—3回; *anvīkṣya*—綿密に検査した; *manīṣayā*—学識的集中; *tat*—それ; *adhyavasyat*—それを確かめた; *kūṭa-sthaḥ*—心の集中と共に; *ratih*—魅力; *ātman (ātmani)*—最高人格主神シュリー・クリシュナに; *yataḥ*—~によって; *bhavet*—そのように起こる。

偉大な人物であるブラフマーは、高い集中力と一意専心の思いでヴェーダを3回学び、内容を綿密に研究したあと、最高人格主神シュリー・クリシュナへの魅力こそが、宗教の最高完成であると確信した。

要旨解説

シュリー・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーはここで、最高のヴェーダの権威者で、主の

質的化身である主ブラフマーについて言及しています。ヴェーダは、物質創造界の始めにブラフマジーに教えられました。ブラフマジーは人格主神から直接ヴェーダの教えを聞いたのですが、ヴェーダを学ぶ将来の生徒たちの探求心を満足させるために、すべての学者が通常するように、ヴェーダを3回研究しました。高い集中力で、ヴェーダの目的に思いを集中させて研究し、その方法をすべて入念に調べたあと、最高人格主神シュリー・クリシュナの純粹無垢な献愛者になることが、すべての宗教原則のなかでもっとも気高いものである、と確証しました。そしてこれこそが、人格主神によってしめされた『バガヴァッド・ギーター』の最後の教えです。ヴェーダの結論はこうしてすべてのアーチャーリヤによって受けいられ、この結論に反論する者たちは、『バガヴァッド・ギーター』（第2章・第42節）でヴェーダ・ヴァーダ・ラタ (veda-vāda-rata) にすぎない、と説明されています。

第35節

भगवान् सर्वभूतेषु लक्षितः स्वात्मना हरिः ।
दृश्यैर्बुद्ध्यादिभिर्द्रष्टा लक्षणैरनुमापकैः ॥ ३५ ॥

bhagavān sarva-bhūteṣu
lakṣitaḥ svātmanā hariḥ
dṛśyair buddhy-ādibhir draṣṭā
lakṣaṇair anumāpakaiḥ

bhagavān—人格主神; *sarva*—すべて; *bhūteṣu*—生命体の内に; *lakṣitaḥ*—見られる; *sva-ātmanā*—自己と共に; *hariḥ*—主; *dṛśyaiḥ*—見られるものによって; *buddhi-ādibhiḥ*—知性によって; *draṣṭā*—見る者; *lakṣaṇaiḥ*—さまざまな兆候によって; *anumāpakaiḥ*—仮説によって。

人格主神・主シュリー・クリシュナは、すべての個々の生命体のうちに住んでいる。そしてこの事実は、見るという行為をとおして、そして知性ある人物に助けられて、知覚したり仮定したりすることができる。

要旨解説

論争の対象として、主は目に見えないのだから、主に身をゆだねたり、超越的愛情奉仕をしたりできるものだろうか、と言われることがあります。そういう一般の人のために、シュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーが、判断力と知覚力を使って至高主を見る有益な助言

がなされています。じっさい主は感覚で見たり感じたりすることはできませんが、真の奉仕の精神を持つ純粋な献愛者には主の慈悲による啓示があり、主の存在をいつでもどこでも見ることができます。そして知性は、人格主神のパラマートマーという完全分身の「導きの姿」であることがわかります。パラマートマーがすべての魂のなかにいることは、ふつうの人にもかんたんにわかります。次のように考えればいいのです。「自分」という認識があり、自分の存在をはっきり感じることができます。すぐには感じられないかもしれませんが、少しでも知性を使えば「自分は体ではない」とわかるはずです。自分の手、足、頭、髪の毛、体などはすべて体の部分であることはわかりますが、それらを「自分」とは呼べません。ですから、知性を使えば、見られている物体と自分を別々に見ることができるはずです。そこですぐに結論できるのは、生命体は、人間であろうと動物であろうと「見ている者」であり、自分以外のほかの物を見ている、という点です。つまり、見る者と見られる物はそれぞれ別の存在だということです。このように知性を少しでも使えば、物質的視野から自分を越えたものを見ようとする生命体は、独自に見たり動いたりする力がないことがかんたんにわかります。私たちは、なにをしてもなにを見ても、さまざまな結合やエネルギーをとおして私たちに与えている物質自然界のエネルギーに依存しています。知覚や動作のための5つの感覚、すなわち(1)聴覚、(2)感触、(3)視覚、(4)味覚、(5)嗅覚、そして活動のための5つの感覚である(1)手、(2)足、(3)発言、(4)排泄器官、(5)生殖器官、そして3つの希薄な感覚である(1)心、(2)知性、(3)自我(合計13)が、物質界のエネルギーのさまざまな配慮をとおして私たちに与えられています。そして私たちが見たり聞いたりしているのは、自然界のエネルギーが作りだした無尽蔵の並び替えと結合にすぎないことははっきりしています。このことがふつうの生命体には独立した知覚や運動の力がないことを決定的に証明しているのですから、そして物質界のエネルギーによって条件づけられていることを私たち自身が感じているのですから、見ているのは精神魂であり、知覚の対象物や、それを見たり聞いたりしている感覚も物質的だと結論することができます。見る者の精神的質は、自分が「物質的に条件づけられた存在」という限られた状態にいることへの不満として表わされています。それが精神と物質の違いです。特定の器官が発達することで物質が見る力と動く力を作りだす、とする賢くない意見がありますが、それは受け入れられません。物質が生命体を作りだしたことをだれも実験で証明していないからです。「未来をあてにしてはいけない、どれほど楽しそうに見えても」という言葉があります。物質が発達し、やがて精神魂になる、という考えは無意味で愚かです。物質が発達して見る力や動く力になったなどという話は、世界のどこでも聞いたことがないからです。ですから、物質と精神は明確に異なる2つの要素であり、知性を使えばこの結論に辿りつきます。このことから、ちょっと

した知性を使って周囲の対象物を見るとき、だれかを「知性を使う者」あるいは「知性を指揮する者」として受けいれれば、物体が動き出す理由もわかります。知性そのものは、自分よりも高い権威者のように私たちに指示を与えるものであり、生命体は知性を使わなければ、見る、動く、食べる、あるいはなにかをすることはできません。知性を活用できない人は混乱し、だから生命体は知性に依存し、あるいはより優れた生物の指揮に依存するものです。その知性は遍在しています。どの生命体も自分なりの知性をそなえており、この知性がある高い権威からの指揮だと考えられるのですから、父親が子どもを動かしている状況と言えます。その高い権威者が、すべての個々の生命体のうちにいる超自己なのです。

ここまで調べてきた時点で、次のような質問をする人がいるかもしれません。ある意味では、私たちの知覚や活動はどれも物質自然の配慮によって条件づけられていても、私たちはよく「私は見ている、私はしている」という言い方をします。ですから、私たちが自己と肉体を同じものと考えているから知覚と動作という物質的感覚が動き、そして超自己という優れた存在が私たちの望みに応じて導いたり供給したりしていると言うことができます。私たちは、知性という形の超自己の導きに従うことで学びつづけたり、「私はこの体ではない」という結論に従って生きたり、まちがった物質的同一視のなかにいつづけることを選んだり、自分が所有者とか活動者というように空想したりすることもできます。自由になれるかどうかは、無知な物質的誤解を望むか、あるいは真実の精神的概念を望むかにかかっています。私たちは、超自己（パラマートマー）を友人や案内人として認めることで、そして知性をパラマートマーという優れた知識に一致させることで、真実の精神的概念に辿りつくことができます。超自己と個々の自己はどちらも精神的存在ですから、どちらも質的には同じであり、物質ではありません。しかし両者が同じレベルにあるはずがありません。なぜなら、超自己が指示を出し、知性を供給し、そして個々の自己がその導きに従うことで行動が適切に行なわれるからです。個々の自己は完全に超自己の導きに依存しています。なぜなら、個々の自己は毎瞬間、物質を見たり、聴いたり、考えたり、感じたり、願ったりすることで超自己の指揮に従っているからです。

判断力は、3つの要素、すなわち物質、精神、超精神で構成されています。『バガヴァッド・ギーター』、あるいはヴェーダの知性に耳を傾ければ、この3つの要素がすべて最高人格主神に依存していることがわかります。超自己は最高人格主神の部分的表われ、あるいは完全分身です。『バガヴァッド・ギーター』は、最高人格主神が自分の部分的表われだけで物質界全体を支配していることを確証しています。神は偉大であり、個々の自己への単なる命令供給者ではありません。ですから超自己は、至高の自己であるプルジョッターマ・絶対人格主神の完全な表われではありえません。個々の自己が超自己を悟ることは自己の悟りの始まりであり、そ

の悟りが高まるにつれて、知性を使い、権威ある経典に助けられて、そしてなによりも主の慈悲によって最高人格主神を悟ることができます。『バガヴァッド・ギーター』の内容は、人格主神シュリー・クリシュナの予備的概念であり、『シュリーマド・バーガヴァタム』は主神の科学がさらに深く説明されたものです。ですから、自分の決意に堅く立脚し、木という体のなかで鳥が別の鳥といっしょに枝に止まっているように（ウパニシャッドで説明されているように）知性の指揮者の慈悲を求めれば、ヴェーダの啓示情報の目的は私たちに確かにしめされ、最高人格主神・ヴァースデーヴァをかんとんに理解できるようになります。ですから、知性ある人は、知性を駆使した生涯をなんども経たあとに、『バガヴァッド・ギーター』（第7章・第19節）が確証するように、ヴァースデーヴァの蓮華の御足に身をゆだねるようになります。

第36節

तस्मात् सर्वात्मना राजन् हरिः सर्वत्र सर्वदा ।
श्रोतव्यः कीर्तितव्यश्च स्मर्तव्यो भगवान् नृणाम् ॥ ३६ ॥

*tasmāt sarvātmanā rājan
hariḥ sarvatra sarvadā
śrotavyaḥ kīrtitavyaś ca
smartavyo bhagavān nṛṇām*

tasmāt—ゆえに; *sarva*—すべて; *ātmanā*—魂; *rājan*—王よ; *hariḥ*—主; *sarvatra*—どこでも; *sarvadā*—いつも; *śrotavyaḥ*—聞かなくてはならない; *kīrtitavyaḥ*—讃えられて; *ca*—もまた; *smartavyaḥ*—思い出されて; *bhagavān*—人格主神; *nṛṇām*—人間によって。

王よ。すべての人間が、いつでも、どこにしようとも、至高主・人格主神について聞き、讃え、思い出すことはどうしても必要なことである。

要旨解説

シュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは、*tasmāt* (タスマートゥ) 「ゆえに」という言葉でこの節を始めています。解放を授ける吉兆な方法として、バクティ・ヨーガという崇高な方法に優るものはない、と前の節で説明しているからです。バクティ・ヨーガの方法は、聞く、唱える、思い出す、主の蓮華の御足に仕える、崇拝する、祈る、愛情をこめて奉仕をする、友好的に主と接する、自分が持っているものをすべて主に捧げる、などのさまざまな方法

をとおして献愛者によって実施されます。これら9つの方法はどれも真実であり、そのいくつか、あるいは一つだけでも修練すれば、誠実な献愛者に望ましい結果をもたらしてくれます。しかし、この9つの方法のなかでも、最初の方法、すなわち聞くことは、バクティ・ヨーガの方法のなかでも最重要とされています。十分に、そして正しく聞かなければ、どの方法でも上達できません。そして聞くためだけに、すべてのヴェーダ経典が用意されているのであり、それは神の力強い化身であるヴァーサデーヴァのような権威ある人物によって編纂されました。そして、主は万物の超霊魂であることが確証されているのですから、主のことはどこでもいつでも聞かれ、讃えられなくてはなりません。それが人間に与えられた特別の義務です。遍在する人格主神について聞くという方法を人間が捨てれば、人間が作った機械を介して伝達されるゴミ情報を聞く犠牲者になります。機械を介して主について聞くという利点があるのですから、機械が悪いというわけではありません。不純な目的のために機械が使われているから、人間文化の基準に急激な墮落を作りだしているのです。ここでは、聞くという行為は人間にとって義務である、なぜなら『バガヴァッド・ギーター』や『シュリーマド・バーガヴァタム』のような経典はそのために用意されているのだから、とされています。人間以外の生物にヴェーダ経典を聞く能力はそなわっていません。人間社会がヴェーダ経典を聞く方法を採用すれば、社会全体の基準を墮落させる不敬な人間が響かせている不敬な音の犠牲にはなりません。聞く方法は、唱える方法によってさらに堅固になります。完璧な情報源から完璧に聞いた人は、遍在する人格主神の存在を確信しますから、さらに熱心に主を讃えるようになります。ラーマヌジャ、マドゥヴァ、チャイタンニャ、サラスヴァティー・タークラ、そしてほかの国ではマホメット、キリスト、他の人物たちなど、偉大なアーチャーリヤたち全員が、いつも、そしてどの場所でも主を広く讃えてきました。主は遍在する方ですから、主を讃えることは、いつでも、どこでも必要なことです。主を讃える方法を実践することで、時間や空間の制限はありません。これをサナータナ・ダルマ (*sanātana-dharma*)、あるいはバーガヴァタ・ダルマ (*bhāgavata-dharma*) といいます。サナータナ (*sanātana*) は、「永遠な、いつでも、どこでも」という意味です。バーガヴァタ (*bhāgavata*) は、「バガヴァーン、すなわち主に関連している」という意味です。主は、あらゆる時と空間の主人ですから、主の聖なる名前はどうしても、世界のどこであっても唱え、讃えられ、思いだされるべきです。この方法が実践されれば、世界中の人々が心から待ち望んでいるほんとうの平和と繁栄がもたらされます。また *ca* (チャ) という言葉には、上記のように、バクティ・ヨーガのほかの方法すべても含まれている、という意味がこめられています。

第37節

पिबन्ति ये भगवत आत्मनः सतां
कथामृतं श्रवणपुटेषु सम्भृतम् ।
पुनन्ति ते विषयविदूषिताशयं
व्रजन्ति तच्चरणसरोरुहान्तिकम् ॥ ३७ ॥

*pibanti ye bhagavata ātmanaḥ satām
kathāmṛtaṁ śravaṇa-puṭeṣu sambhṛtam
punanti te viṣaya-vidūṣitāśayaṁ
vrajanti tac-caraṇa-saroruhāntikam*

pibanti—飲む者; *ye*—～である彼ら; *bhagavataḥ*—人格主神の; *ātmanaḥ*—もっとも愛しい方の; *satām*—献愛者の; *kathā-amṛtam*—そのメッセージの甘露; *śravaṇa-puṭeṣu*—耳の穴の中に; *sambhṛtam*—完全に満たされて; *punanti*—浄化する; *te*—彼らの; *viṣaya*—物質的な楽しみ; *vidūṣita-āśayam*—穢れた人生の目標; *vrajanti*—戻って行く; *tac*—主の; *caraṇa*—足; *saroruha-antikam*—その蓮華の近くに。

聴覚を使って、献愛者が愛してやまない主クリシュナの甘露あふれるメッセージを飲み、その魅力に完全に没頭する者たちは、物質的楽しみというよごれた人生の目標を清め、やがて、神のもとに、主（人格主神）の蓮華の御足のもとに帰っていくのである。

要旨解説

人間社会の苦しみは、穢れた人生の目的、すなわち物質資源の支配が原因です。人類が感覚満足のために、まだ開発されていない資源を搾取すればするほど、かえって主の幻想・物質エネルギーによって騙され、こうして世界の苦しみは減るどころか、さらに深刻になっていきます。生活に必要なものは、穀物、ミルク、くだもの、木材、石材、砂糖、絹、宝石、綿、塩、水、野菜などの形で主から供給されており、世界中の、いや宇宙のすべての惑星に住む人間やほかの生物を含めた生命体が生きていける十分な量が用意されています。供給源は完璧ですから、正しい方法をとおして必需品を手に入れるために人間がわずかなエネルギーを使いさえすればいいのです。機械、道具、巨大な鉄工プラントに頼っても、不自然に快適な生活を作りだしているにすぎません。快適な暮らしというものは、不自然な必要物に頼るのではなく、質素な生活と高邁な思考で可能になるのです。人間社会の最高完成の思考が、ここでシュカデーヴ

ア・ゴースヴァーミーによってしめされています。それは、『シュリーマド・バーガヴァタム』を十分に聞く、ということです。カリという現代に生き、完璧な人生のビジョンを失った人々にとって、『シュリーマド・バーガヴァタム』は真実の道を照らしだすたいまつです。シュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァーミーは、この節で使われている *kathāmr̥tam* (カタハムリタンム) について解説し、『シュリーマド・バーガヴァタム』は人格主神の甘露あふれるメッセージである、と述べています。『シュリーマド・バーガヴァタム』を十分に聞くことで、物質を支配しようとする穢れた人生の目的はなくなり、世界中の一般大衆は知識と喜びにささえられた平和な生活が送れるようになります。

純粋な献愛者にとって、主の名前、名声、質、交流者たちにまつわる話題はどれも心地よく、さらにその話題が、ナーラダ、ハヌマーン、ナンダ・マハーラージャ、ヴリンダーヴァナの住人たちのような偉大な献愛者たちに認められているのですから、そのメッセージが超越的で心と魂にも心地よいものであることは当然です。

そして『バガヴァッド・ギーター』のメッセージと、次に『シュリーマド・バーガヴァタム』のメッセージを絶えず聞きつづける人は、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーがこの節で請けあっているように、人格主神に到達し、巨大な蓮華に似たゴーローカ・ヴリンダーヴァナという精神的惑星で主に超越的な愛情奉仕をするのです。

この節で勧められているように、バクティ・ヨーガの方法をそのまま受け入れ、主の超越的なメッセージを十分に心ゆくまで聞けば、主の非人格的ヴィラトウを瞑想することなく、物質的な穢れを洗い流すことができます。そしてバクティ・ヨーガを修練しても物質的な穢れから浄化されないのであれば、その人は偽物献愛者に違いありません。そのような詐欺師には、物質的な束縛から解放される治療法はありません。

これで、バクティヴェーダンタによる『シュリーマド・バーガヴァタム』、第2編・第2章、「心のうちに住む主」の要旨解説を終了します。